

シイナグスク

— 範囲確認調査報告 —



2004年 3 月

な き じん
沖縄県今帰仁村教育委員会

シイナグスク

－範囲確認調査報告－

2004年3月

今帰仁村教育委員会

序

この報告書は、今帰仁村内にある埋蔵文化財の保護を目的に実施された村内遺跡発掘調査の報告を収めたものです。具体的には、埋蔵文化財の分布調査・範囲確認を目的に実施されたシイナグスクの発掘調査成果を収録しています。

本遺跡の発掘調査は平成14年度に行い、その後資料整理を実施しました。今回調査の行われたシイナグスクは、今帰仁グスクの築城以前に城造りを行ったグスクとして知られる周知の文化財で、これまでグスクの規模については具体的にされておりませんでした。今回シイナグスクの試掘調査を行うことでその範囲を確認することができました。この結果これまで知られていた遺跡範囲よりも広がる事が確認されるとともに、石積みや柱穴などの遺構、13世紀に遡る土器や陶磁器が出土するなど、多くの成果を得ることができました。特に今回の調査によって、今帰仁村におけるグスク時代開始期の様相の一端がつかめたことは貴重な成果であります。

本書が多くの方々に有効に活用されることを希望するとともに、文化財愛護思想の高揚、諸開発計画における保存協議の円滑な推進に寄与することを期待します。

2004年 3 月

今帰仁村教育委員会
教育長 山城 清光

例 言

1. 本書は平成13年度から今帰仁村教育委員会が文化庁の補助事業「国宝等重要文化財等保存整備事業」として実施した「村内遺跡発掘調査」の成果報告である。具体的には範囲確認を目的として実施した「シイナグスク」の調査報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、沖縄県今帰仁村呉我山72番地・ほかに所在する。
3. 第Ⅴ章の「シイナグスク出土の植物遺体」は高宮広土氏（札幌大学女子短期大学部）にご執筆頂き本報告を充実させることが出来た。記して謝意を表する。
4. 発掘調査及び整理作業にあたり次の方々から指導・助言をいただいた。（五十音順）
赤嶺 和雄（設計同人G A N代表・今帰仁城跡調査研究整備委員）
上原 静（沖縄国際大学・今帰仁城跡調査研究整備委員）
岸本 義彦（沖縄県教育庁文化課） 島 弘（那覇市教育委員会）
田中 克子（福岡市教育委員会） 田里 一寿（宜野座村教育委員会）
知名 定順（宜野座村教育委員会）
坪井 清足（元興寺文化財研究所長・今帰仁城跡調査研究整備委員長）
名嘉正八郎（今帰仁城跡調査研究整備委員） 仲宗根 啓（那覇市教育委員会）
仲宗根 禎（名護市教育委員会） 中村 愿（北谷町教育委員会）
比嘉 久（名護市教育委員会） 村上 恭通（愛媛大学助教授）
森本 朝子（福岡市教育委員会）
山田 勝巳（財団法人沖縄海洋博記念公園理事長・今帰仁城跡調査研究整備委員）
四本 延宏（伊仙町教育委員会社会教育課）
5. 本書掲載の現場における遺構実測図・測量図は宮城弘樹・玉城靖・仲里なぎさが作成した。
6. 出土遺物は今帰仁村教育委員会で保管する。
7. 調査時の撮影及び遺物の撮影については宮城・玉城が行った。
8. 本書の作成・執筆・編集は宮城が行った。
9. 遺物実測図の番号と図版番号は一致するように配置してある。

目 次

第Ⅰ章 シイナグスクの概要

- 1 シイナグスクの位置と環境 2～3
- 2 シイナグスクの歴史概観 4

第Ⅱ章 調査の概要

- 1 調査経過 6～7
- 2 調査組織 8
- 3 調査地区 9

第Ⅲ章 層序と遺構

- 1 層 序 12
- 2 遺 構 13

第Ⅳ章 遺 物

- 1 はじめに 24
- 2 土 器 25
- 3 陶磁器 31
- 4 カムイヤキ須恵器 33
- 5 石 器 34
- 6 鉄製品 34

第Ⅴ章 シイナグスク出土の植物遺体

- 1 遺跡の調査の概要 38
- 2 バック・グラウンド 38
- 3 検出された炭化種子 40
- 4 まとめ 42

第Ⅵ章 大井川沿いの遺跡について 45

第Ⅶ章 おわりに 55

- 参考文献 59
- 図 版 61

図表目次

図

1. 沖縄本島位置図
2. 今帰仁村位置図
3. シイナグスク位置図
4. 試掘調査箇所位置図
5. シイナグスク縄張り図
6. シイナグスク縄張り詳細図（部分）
7. T. P. 2
8. T. P. 10
9. 炉跡詳細図
10. T. P. 3
11. T. P. 7
12. T. P. 8
13. T. P. 6
14. 一の郭石積み詳細図（部分）
15. シイナグスク出土土器
16. シイナグスク出土土器
17. シイナグスク出土土器
18. シイナグスク出土陶磁器
19. シイナグスク出土カムイヤキ須恵器
20. シイナグスク出土石器・鉄製品
21. 大井川沿いの文化財分布図
22. ウチグスク採集遺物
23. 謝名大島原遺跡採集遺物
24. 謝名大島原遺跡採集遺物
25. 謝名大島原遺跡採集遺物
26. 天底後原遺跡採集遺物

表

1. 今帰仁村内の主なグスク・グスク時代遺跡
2. シイナグスク出土遺物集計表
3. シイナグスク出土土器観察表
4. シイナグスク出土土器観察表
5. シイナグスク出土陶磁器観察表
6. シイナグスク出土カムイヤキ須恵器観察表
7. シイナグスク出土石器観察表
8. シイナグスク出土の植物遺体
9. シイナグスク出土のイネサイズ
10. シイナグスク出土のアワサイズ

写真

1. シイナグスクより検出された炉跡
2. 土壌サンプルのフローテーション処理
3. シイナグスク出土植物遺体（高宮広土撮影）

図版

1. シイナグスク航空写真(株式会社きもと撮影)
2. シイナグスク伐採状況
3. シイナグスク測量調査の様子
4. シイナグスク一の郭石積み遺構清掃
5. シイナグスク一の郭石積み近影
6. T. P. 1 調査前遠景
7. T. P. 1 試掘調査状況
8. T. P. 2 試掘調査状況
9. T. P. 2 土器出土状況近影
10. T. P. 2 完掘状況近影
11. T. P. 3 試掘調査状況
12. T. P. 3 完掘状況近影
13. T. P. 4 調査前遠景
14. T. P. 5 完掘状況近影
15. T. P. 6 完掘状況近影
16. T. P. 7 遺構検出状況近影
17. T. P. 7 遺構完掘状況近影
18. T. P. 8 獣骨出土状況近影
19. T. P. 8 完掘状況近影
20. T. P. 9 完掘状況近影
21. T. P. 10 調査前遠景
22. T. P. 10 遺構検出状況近影
23. T. P. 10 遺構完掘状況近影
24. シイナグスク出土土器
25. シイナグスク出土土器
26. シイナグスク出土土器
27. シイナグスク出土陶磁器・カムイヤキ須恵器
28. シイナグスク出土石器
29. ウチグスク採集陶磁器
30. 謝名大島原遺跡採集遺物
31. 謝名大島原遺跡採集遺物
32. 謝名大島原遺跡、天底後原遺跡採集遺物

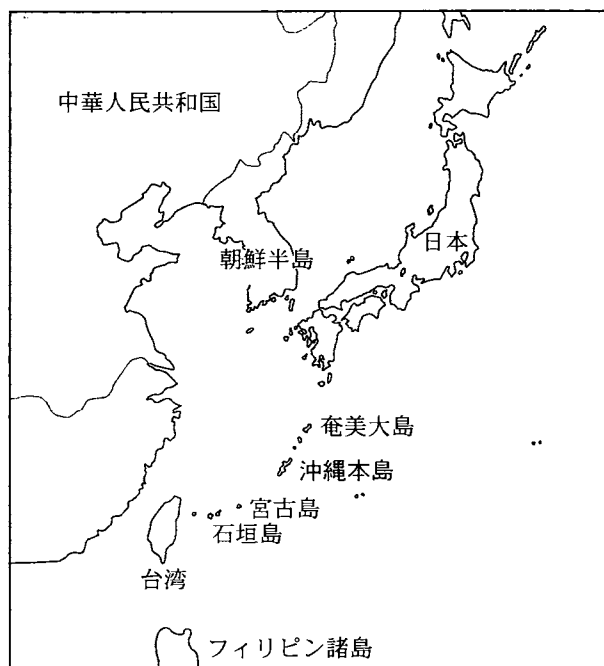
第 I 章

シイナグスクの概要

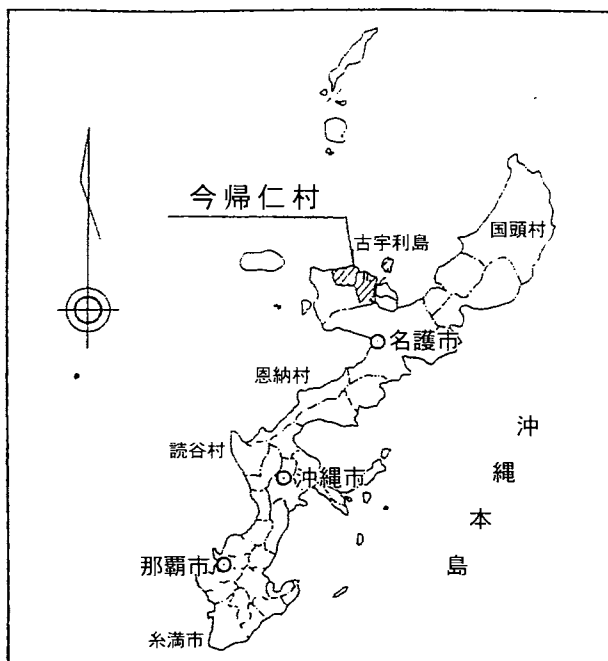
1 シイナグスクの位置と環境

シイナグスクは本部半島のほぼ中央に位置し、行政区は今帰仁村字呉我山に所在する。本部半島は東シナ海に突き出した形で半島を形成し、地形的には主に乙羽岳と嘉津宇岳・八重岳を中心とした南北にまたがる古生界からなり、両山地の四方には断層が推定され、いずれの山地も地壘状の山塊となる。古期石灰岩（今帰仁層）が分布する乙羽岳周辺にはカルスト地形が発達し、特に景勝地としても有名な大堂と接する今帰仁村今泊の今帰仁層の山頂部には今帰仁城跡が立地している。他方、乙羽岳の南側にも古生代二畳紀の石灰岩（本部石灰岩）が分布しており、河川域は急斜面をつくり岩峯状の山塊となり丘陵頂部にシイナグスクが立地する。本部半島の中央山間地域は主に古生代～中生代の堆積岩からなるが、海岸付近には第四紀の石灰岩（琉球石灰岩）が分布し、この地層の堆積する地域は40～70mの中位面と30m以下の下位面が広く分布している。石灰岩段丘がつくりだした台地縁辺部にもグスクが点在している。低地は比較的乏しいが大井川等河川流域に発達する沖積地や谷地下流の谷底部に認められる。大井川は流域面積が22.9km²で、流路延長8kmの二級河川として沖縄本島の河川の中でも比較的大きな河川である。

このような地質地形の中に位置する呉我山は沖縄本島の本部半島山間部にあり、河川沿いの盆地の少ない土地を利用し、ミカン、パイナップルなどの果樹を栽培する散村である。シイナグスク北西方にそびえる乙羽岳はリュウキュウアオキースダシ群団となり、これが豊かな水源とし豊富な水量を誇る大井川の源となっている。川沿いには上流から本部町の伊豆味、今帰仁村の呉我山、玉城、天底、仲宗根の集落が展開し、グスク時代の遺跡もいくつか確認されている。また、これに関わる拝所などが点在し河川沿いに人との係わりが深く認められる。



第1図 沖縄本島位置図



第2図 今帰仁村位置図



第3図 シイナグスク位置図

表1 今帰仁村内の主なグスク・グスク時代遺跡

	遺跡名称	字名	立地	標高(m)	発掘	遺跡現況	備考
1	古宇利グスク	古宇利	海岸岩礁	30		畑地	石積みがあったとされる
2	古宇利原A遺跡	古宇利	崖縁辺部	10	有り	公民館跡地	陶磁器等採集
3	古宇利原C遺跡	古宇利	崖縁辺部	25		宅地・拝所	陶磁器等採集
4	運天貝塚	運天	崖縁辺部	5		畑地	陶磁器等採集
5	ウパカ遺跡	運天	海岸砂地	3		宅地・拝所	陶磁器等採集
6	阿那川原遺跡	上運天	崖縁辺部	15		畑地・宅地	陶磁器等採集
7	ウンシマヌウガンジュ(旧称:ウンスマヌ)	上運天	丘陵頂部	35		拝所	陶磁器等採集
8	親川原遺跡	上運天	崖縁辺部	20		宅地・畑地	陶磁器等採集
9	メーヌバマヌウガンジュ遺物散布地	上運天	崖縁辺部	15		拝所	グスク土器採集
10	兼久原遺跡	湧川	海岸砂地	2		畑地・宅地	陶磁器等採集
11	シイナグスク	呉我山	丘陵頂部	90	試掘	原野	本調査報告
12	ウチグスク	玉城	丘陵頂部	40		原野	保養施設建設により滅失
13	グスクンチジ	仲宗根	丘陵頂部	10		公園	神アサギあり
14	天底後原遺跡	天底	台地上	45	試掘	畑地	陶磁器等採集
15	大島原遺跡(旧称:ウンジョウヘイ)	謝名	丘陵頂部	50		拝所	陶磁器等採集
16	謝名遺跡	謝名	崖縁辺部	30		畑地	陶磁器等採集
17	平敷ウガン(拝所)・スガー御嶽	平敷	崖縁辺部	15		拝所	拝所?
18	港原第2遺跡	崎山	海岸砂地	5		畑地	陶磁器等採集
19	兼次古島遺跡	兼次	崖縁辺部	50		畑地	兼次集落の故地
20	諸志御嶽	諸志	丘陵頂部	38		原野・拝所	御嶽、墓あり
21	ハナグスク	崎山	丘陵頂部	30		畑地	石積みあり
22	アカン墓遺物散布地	今泊	崖縁辺部	14		原野	グスク土器採集
23	今帰仁城跡(別称:ナチジグスク・北山城)	今泊	丘陵頂部	100		拝所・公園	世界遺産・史跡
24	今帰仁ムラ跡	今泊	丘陵緩斜面	80	有り	畑地	集落跡
25	大川原遺跡	今泊	微高地	10	有り	畑地	集落跡
26	ミームングスク	今泊	丘陵頂部	40	試掘	原野	石積み遺構
27	ターラグスク	今泊	丘陵頂部	65		原野	石積み遺構

2 シイナグスクの歴史概観

今帰仁村内の先史遺跡の多くは海岸線沿いの砂丘地に立地することが一般的である。このため山がちな今帰仁村内陸部の先史時代遺跡は、縄文時代後期並行期の謝名遺跡、兼次古島遺跡などを除いてほとんど確認されていない。このためシイナグスクの立地する呉我山地域一帯の山がちな地域では先史時代の遺跡は現在のところ未見である。このような山間部に人が入り、生活地を求めた最初の時代はシイナグスクの登場するグスク時代（13世紀頃）からである。グスク時代になると、この大井川沿いには多くの遺跡が認められており、今回調査したシイナグスクを含め地元知られている主なものだけでも、4つのグスクがある。具体的に紹介すると、河口である北側からグスクンチジ、ウチグスク、シイナグスク（以上今帰仁村内）、ジングスク（本部町）と続き河川沿いの丘陵地に築かれているのがわかる（第21図）。このような河川沿いにグスクが立地する例は今帰仁城跡が立地する志慶真川沿い、大井川と河口を一つとするジニンサガーラなども同様で、水系がグスク時代に重要な存在であったことが想像される。さらにグスクのみならず、グスク時代から近世に展開した集落が大井川の西方に広がっており、謝名遺跡や、謝名大島原遺跡、東方台地上にある天底にもグスク時代から近世の遺跡が点在している。

さて、シイナグスクについては史書や『おもろさうし』には登場しないが、『国頭郡志』などによれば『長浜系図』に英祖王の二男に北山世の主「湧川王子」があって、この人がシイナ城を築いたので湧川王子と名乗ったのではないだろうか、ということが考えられるとされる（島袋1919）。野史の中に登場するシイナグスクについて推し量るのは困難である。しかし、伝説の上では「誰であったかということは聞いていないが、北山城のできる前に、ここに城を築いて住んでいた按司がいたという。然し、ここは水の便が悪かったので、しばらくしてから北山城に移った（新城1975）」と言い伝えられており、今帰仁城の築城以前に築城を目的として選地されたグスクとされ、水の便が悪いので築城を止め、その後廃城になったグスクとして伝承されている。

シイナグスクの立地する呉我山は湧川地内の中山と古拝から17戸、天底三謝原から12戸、玉城の西アザナと古呉我から57戸を整理し大正9年に分字された集落で比較的新しい字である（糸数1975）。このためシイナグスクの立地する小字名三謝原は大正9年以前は天底地内にあった。地籍上の分割は戦後になってからである（今帰仁村歴史文化センター 1999）。この天底は、方言ではアミス、アミスクと呼称している。『琉球国高究帳』（1635～48）には「あめそこ村」として文献上確認できる。村内でも士族が多い村として知られており、寄留士族が家々を散在するかたちでつくっていたことによるものと理解される。

現在呉我山は80世帯、人口201人（2003年12月末現在住民基本台帳）で村内でも人口の少ない字である。山間部のため散村となりパインやミカンなどを栽培する農村で、シイナグスクの立地する麓にはシイナという集落があり、字を接し湧川にチグヌフニ、ガジマンドーの集落がある。ガジマンドーは小字名が鎌城原でグスク地名の原名であることも興味深い。

呉我山は山がちな地形から道も不便であったが、1989・90年に呉我山・乙羽両トンネルが開通し、今帰仁村の中心街である仲宗根から玉城、呉我山を抜け名護市へ行くことができるようになり交通の便も良くなっている。

第Ⅱ章

調査の概要

1 調査経過

村内における埋蔵文化財の取り扱いについては昭和56～58年度に遺跡の分布調査が実施されて以後これに報告された遺跡を「周知の遺跡」として調整している（今帰仁村教育委員会1984）。この他にも周知の遺跡周辺についても取り扱いに関して事前協議を行っている。しかし、この分布調査が実施され既に20余年経過したこともあり、遺跡の件数やその遺跡範囲などの情報について見直しを図る必要に迫られている。他方、今帰仁村内にある古宇利島に架かる架橋の建設に伴い、交通網が整備され遺跡周辺地域においても開発計画が増加していた。

このため村教育委員会では遺跡の取扱について、その詳細の内容を把握し開発計画に資するため、開発計画のある地域において遺跡範囲確認調査を実施した。実施した遺跡は下記についてである。

遺跡分布調査	試掘調査・測量調査等
大井川沿い	シイナグスク・天底後原遺跡
古宇利島	古宇利原A遺跡・古宇利原B遺跡
今帰仁城跡周辺遺跡	今帰仁ムラ跡・ミーミングスク

今回は平成14年度に実施したシイナグスクの範囲確認調査について報告するものである。なお、平成13年度に試掘調査を実施した古宇利原A遺跡は試掘調査の結果遺跡の範囲を確定し、当該地域の一部が道路建設に係ることから、平成14年度から沖縄県によって実施される古宇利大橋橋梁整備事業に伴う取り付け道路の建設に係る緊急発掘調査を実施している。また、同年に実施した古宇利原B遺跡も範囲確認調査の結果開発予定地域に遺跡が分布することが明らかになり、平成15年度に今帰仁村によって実施される古宇利横田原線の道路建設整備事業に伴い緊急発掘調査が実施されている。このため成果の報告については記録保存調査によって刊行される予定の発掘調査報告書に掲載する計画である。平成15年度に実施した調査については平成16年度に継続予定しているので次年度以降の報告に譲る。

平成13年度	事業費	3,000,000円
	内 容	分 布 調 査：古宇利島内 試 掘 調 査：古宇利原A遺跡・古宇利原B遺跡 整 理 作 業：古宇利原A遺跡・古宇利原B遺跡
平成14年度	事業費	3,000,000円
	内 容	分 布 調 査：大井川河川沿い 発 掘 調 査：シイナグスク・天底後原遺跡 縄張り図作成：シイナグスク 整 理 作 業：古宇利原A遺跡・シイナグスク
平成15年度	事業費	3,000,000円
	内 容	分 布 調 査：今帰仁城跡周辺地域 発 掘 調 査：今帰仁ムラ跡・ミーミングスク 整 理 作 業：シイナグスク・ほか

シイナグスクに係る開発計画の経緯は、協和工業株式会社から平成14年2月18日にリサイクルセンターの造成計画が持ち上がったことによる。造成計画は土地の所有者である協和工業によって遺跡の北側地域約40,000m²を造成し、リサイクルセンターを設けるという内容であった。村教育委員会としては造成計画地と遺跡の所在地との関係を明確にし、遺跡の取扱について詳細な情報を提供する義務があった。このため、当初屋我地仲宗根線として計画される地域の調査を予定していた調査計画より先行し、シイナグスクの調査を優先させた。なお、屋我地仲宗根線の道路計画は古宇利架橋の建設事業とも関連があり、今帰仁村の本島側と屋我地島をつなぐ橋梁整備事業及びこれの延長道路の建設である。既に踏査によって一部事業地に埋蔵文化財が所在することを確認していたので、範囲確認を目的とする試掘調査を後日実施した。平成14年度にはこの両地域の調査を実施することとなった。

シイナグスクの調査は平成14年5月20日から伐採を開始、6月12日から試掘調査を実施した。伐採によって石積み遺構に囲壁される空間が発見された。この空間については当初から知られていた遺跡内であるため3ヶ所程度試掘坑を設け内容の把握に務めた。調査の中心は造成の計画のあった北側地域に絞り合計7ヶ所の試掘坑を設置した。

この結果後述するように比較的安定した堆積層中に大量の遺物が包含していることを確認し、遺跡の広がりを確認するとともにその内容についても13世紀後半頃を中心とした年代にまとまることが判明した。調査は亜熱帯の本地域特有の大木や蔓植物に難渋し伐採に時間を要した。また、丘陵地の頂部ということもあって、作業車輛も麓までしか入らず、少人数で山頂部まで行き人力で行うこととなった。発掘調査作業は8月に概ね作業を完了した。

調査結果については、平成14年10月18日今教社文第77号にて「協和工業リサイクルセンター造成工事における文化財の範囲について（報告）」を行い、地権者である協和工業株式会社と平成14年度から継続して調整を進めてきた。この結果、平成16年2月20日に協和工業所有地72番地を分筆し隣接する村有地と用地交換を実施することで合意し、協和工業株式会社所有地における文化財地域として特に重要な地域4,948.78m²について公有化することができた。今回の調整に際しては協和工業代表取締役の嘉陽宗明氏には文化財調査に格段のご配慮をいただき、かつ調査成果を熟知頂き文化財地域として重要な地域の公有化を了承していただいたことに感謝申し上げます。

本報告書の整理作業は平成15年度に実施したが、当該年度に今帰仁城跡周辺整備事業が実施され、これに伴う緊急調査と同時並行して整理作業を進めていたかねあいもあり、思うように整理作業を実施進行することができなかった。それでも平成16年3月までには調査後の報告書作成も実施することができた。なお、発掘調査報告書作成後は今帰仁村教育委員会にて出土遺物及び記録類を保管する。

2 調査組織

シイナグスクの発掘調査は平成14年度に実施し、資料整理作業については平成15年度に行った。発掘調査では沖縄県教育庁文化課の指導により下記の体制で実施した。また、当該事業以外にも、沖縄県緊急地域雇用創出特別事業による今帰仁城跡及び関係遺産群環境整備事業による文化財の環境美化業務の一環として、伐採作業の大部分をこれで実施している。特に今回のような広域に及ぶ遺跡範囲の確認調査及び遺跡の踏査は、この事業が無ければ実施不可能であったと言っても過言ではない。

平成14年度

事業主体	今帰仁村教育委員会			
調査責任者	教育長	山城 清光		
社会教育課長		諸喜田展生		
社会教育課長補佐		仲原 弘哲		
事務総括	文化財係長	田港 朝津		
事務	文化財係	玉城 寿		
調査担当者	"	宮城 弘樹		
調査補助員	臨時職員	玉城 靖	仲里なぎさ	
発掘調査作業員	"	祖堅 直	祖堅 直隆	祖堅 直樹
	"	仲地 正樹		
	"	比嘉 香代	田港 朝史	祖堅ミサ子
資料整理	"	玉城 靖	仲里なぎさ	松本 綾子

平成15年度

事業主体	今帰仁村教育委員会			
調査責任者	教育長	山城 清光		
社会教育課長		諸喜田展生		
社会教育課長補佐		仲原 弘哲		
事務総括	文化財係長	當山 清巳		
事務	文化財係	玉城 寿		
事務	"	玉城 靖		
調査担当者	"	宮城 弘樹		
発掘調査アドバイザー		金武 正紀		
調査補助員	臨時職員	与那嶺 俊	仲里なぎさ	
資料整理	"	仲里なぎさ	松本 綾子	金城千恵子
	"	上間 恵子		
	"	与那嶺いずみ	西谷麻希子	鈴木 美和
	"	仲村あずさ		

3 調査地区

発掘調査は範囲確認を目的として実施した。このため開発事業計画地域に沿って北側地区及び東側地区の掘削予定範囲について主に実施することとした。試掘調査で確認する内容は遺物包含層の有無をひとつの基準としているため試掘面積は極力小さくすることとした。事業計画地域沿いに山裾から造成計画地までの40,000m²を、岩盤が露頭していない平場を探しては、平場一ヶ所につき1つの試掘坑を設けた。特に取付道路の設置により遺跡の破壊が免れ得ない地域において確認した。設置順に従って1から順次番号を付し、最終的には10ヶ所の試掘坑を設けた（第4図）。調査の結果試掘坑（以下テスト・ピット〈Test・Pit〉を略号T.P.で紹介する）2・6・7・8・9・10において遺物包含層が確認された。当初想定していたよりも遺跡の範囲が広範に広がることが確認された。

確認された内容によって工事予定地区には、シイナグスクと一体となる重要な施設群が設置されていることが判断された。試掘調査と合わせて事業計画地域を中心に第5・6図に図示した約10,000m²について縄張り図を作成した。南側地域については不備も多く今後現況測量を実施し追加するとともに、グスク全体の縄張りを完成していくことが望まれる。

T.P.1は工事計画地域において確認できた平場で、南北2m×東西1mで設定した。堆積層は3層からなり、Ⅰ層は2～4cm程度の厚さで黒褐色の腐葉土層、Ⅱ層が15cm～20cmの堆積でやや粘性のある小礫を含む旧耕作土層、Ⅲ層が20～30cmの茶褐色土層で粘性のある土層で、僅かに炭化物を肉眼で確認できる。旧表土と考えられる。当該調査区では遺物包含層は確認できなかった。Ⅳ層は地山で赤褐色で堅く締まった土層。

T.P.2も工事計画地域において確認できた平場で、南北4m×東西1mで設定した。堆積層は3層からなる。当該地区の層序については次項で詳述する。全体的に北側に向かって傾斜する平場で、地山面も北側へ傾斜する形であった。このため、堆積も北側ほど厚くなる。北壁沿いに礫がやや集中して認められたことから当初今帰仁城跡などで確認される平場造成の際の土留め的な機能をもたせ、人為的なものと考えたが詳細は検討を要する。地山直上で火受けした焼土面が検出されたが散在的である。遺物包含層が認められ出土数も比較的多い。

T.P.3は一の郭を囲壁する東側部分について、石積みの構造を確認し石積みの構築年代を把握する目的で試掘調査を実施した。結果的には石積みの根石部分は全て岩盤に据えられており検出された包含層との関係等を確認するには至らなかった。

T.P.4はグスク北東斜面の事業計画地域において1×1mで試掘坑を設けた。確認調査を実施したが明確な遺物包含層は認められなかった。

T.P.5もT.P.4と同様明確な遺物包含層は認められなかった。

T.P.6は一の郭の東側に位置する小さな平場を把握する目的で実施した。平場は露頭する岩盤に囲まれる。平場中央部はやや高まりとなり周囲は溝状に窪んでいる。このような平場の特徴は近現代に畑として利用された結果と考える。1m×2mの試掘坑を設けた。ここでは包含層が確認され、小穴ではあるがピットも確認された。

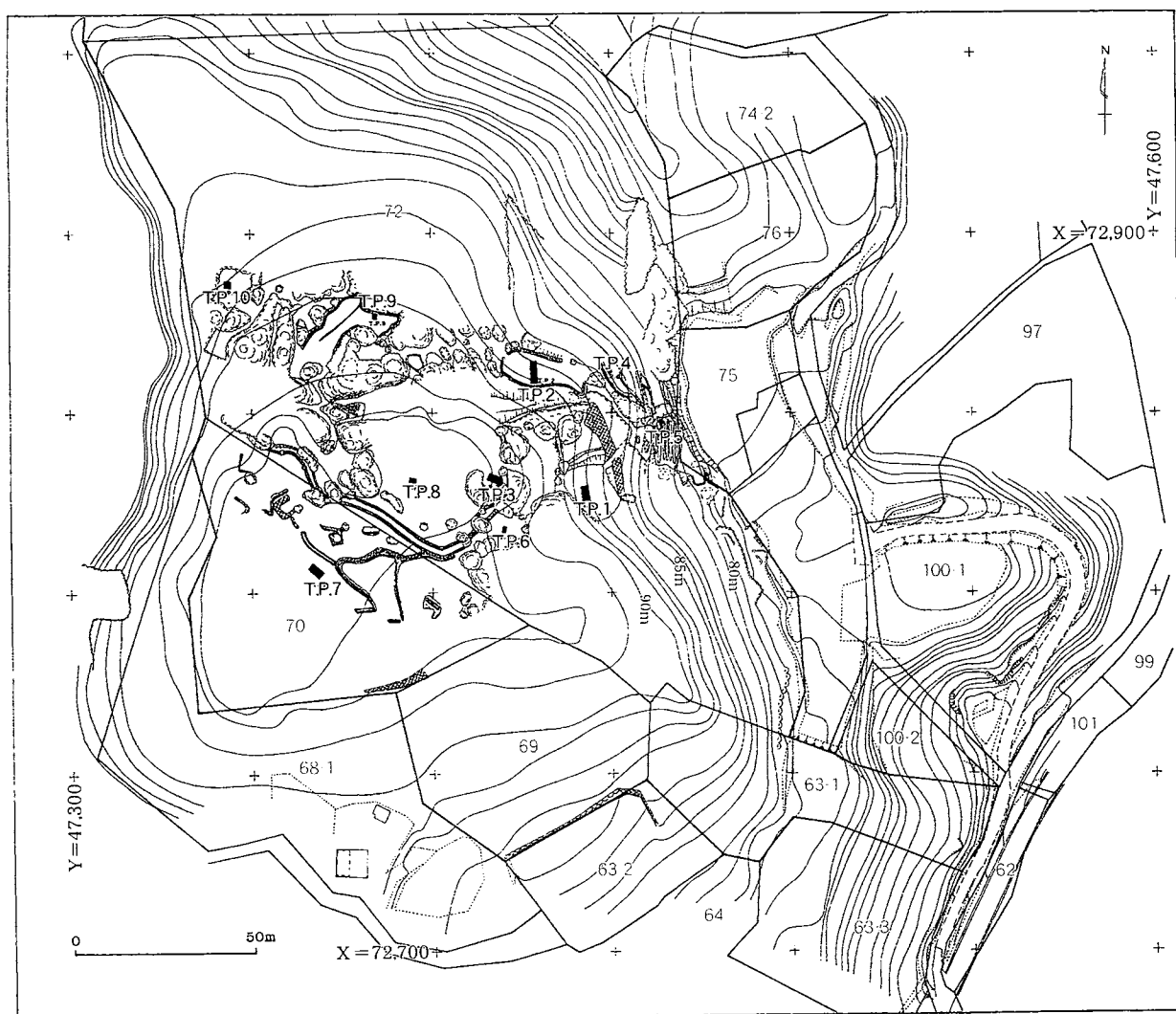
T.P.7は二の郭の平場において実施した。シイナグスクの城郭規模を確認するとともに、建物跡等の遺構の有無を確認することを目的とする。ここでもピットを幾つか確認することができた。二の郭においてはグスク時代において恒常的な生活が営まれる場所として機能し

たと推定された。

T.P.8は一の郭の機能を確認する目的で調査を実施した。調査の結果二の郭同様恒常的な生活が営まれたものと推定された。調査面積が狭いこともあって両調査地点とも建物の規模を推定することは困難であるが今後の調査によって明らかにされるべきであろう。

T.P.9は一の郭北側に広がる露頭岩に囲まれた平場について調査を実施した。当該地区は工事の計画地域になっているため遺跡の有無確認を目的に実施した。また、T.P.6や二の郭などで確認された、平場内外縁の溝についても確認されている。これを単に畑との関係だけで解釈されるものか、あるいはグスク時代からの何らかの機能を有する遺構なのかを検証することを目的に平場外縁部分（溝）において実施した。

T.P.10は北側地区において確認できる最も西側の平場において実施した。T.P.6同様露頭岩に囲まれた平場で面積は小さい。平場のほぼ中央部に1 m×2 mの試掘坑を設けた。作業を進めるなか、下面から遺構が検出されたため遺構のプランを確認することを目的に調査面積を拡張している。



第4図 試掘調査箇所位置図

第Ⅲ章

層序と遺構

1 層序

層序は基本的にⅠ層＝表土、Ⅱ層＝耕作土、Ⅲ層＝遺物包含層、Ⅳ層＝地山に分層できる。Ⅲ層の遺物包含層として確認していたものは、地区によってその状況が異なるが、いずれも単一文化層と考えられ時間差はほとんど無い。最も層が厚かったT.P.2では第7図に図示したような堆積層が確認できた。

Ⅰ層（黒褐色土層） 現代遺物を含む腐葉土層、2～5cmの薄い土層からなる。土色は黒褐色（3/1）で粘性に乏しく遺跡全体を被覆する層である。

Ⅱ層（褐色土層） 粘性のない赤褐色と暗褐色の混在する耕作土層。現代遺物を含む層で約20cmの水平堆積となる。土色は褐色（4/4）で粘性は無く耕作はあまり深くには及んでいない。

Ⅲ層（褐色土層） T.P.2ではa b c dの4枚に分層できる。Ⅲa層（暗褐色3/3）20cmの水平堆積層。Ⅲb層（黒褐色2/2）傾斜する地山層に堆積。Ⅲc（黒褐色3/2）はやや赤みがかり地山への移行層かと思われたがさらにその下層にⅣ層が認められるためⅢcとした。

Ⅲd層（黒褐色3/1）で地山直上に僅かに認められた層で焼土などが確認された。当初これをⅣ層としていたため、集計でもⅣ層となっている。厚いところでは50cmを計り、薄いところでは約10cmとなる。遺物を大量に含む包含層である。

Ⅳ層（明赤褐色粘土層・石灰岩）

マーグ（赤土）の粘土層で地山。無遺物層。T.P.2では調査区の北側に向かって傾斜している。調査地域一帯は石灰岩が露頭する丘陵に位置しているため、この起伏の低地や平地の土層がマーグとなる。

2 遺構

シイナグスクは地元で語り継がれる伝説の上では、今帰仁城築城以前に築城を目的に選地したグスクとされる。しかし、今帰仁城跡のような石垣で幾重にも囲まれる状況は確認されていない。沖縄本島の多くの地域で構築されたグスクは琉球石灰岩台地あるいは丘陵頂部・緩斜面に構築されることが多い。あわせて多くのグスクが聖地化し拝所、御嶽を有する。このような観点からグスクを踏査すると第5・6図のような遺跡内の平場空間構成が見て取れる。

シイナグスクも例に漏れず山頂部に築かれており、拝所の所在を示す香炉が設置される箇所がある(A)。この他にもグスク内には洞穴(方言でアブー)が口を開けており(B)、伝説の酒れ井戸を連想させる。シイナグスクで確認される平場、露頭岩盤、自然崖、石積み等は、シイナグスクに居住したであろう集団の自衛意識として防御機能を軍事的側面から考察する要素があると推察される。例えば、シイナグスクにある(仮称)一の郭を中心に南側には二の郭が広がっている。具体的には詳細な調査に委ねられるが、更に南側にも石積みを確認されるため三の郭の存在も推定される。このような状況から丘陵頂部を中心に南側に連鎖的に平場を有していることが分かる。また一の郭北側には露頭した岩盤が発達しており、この地域一帯の非岩盤露頭地域にある狭小な平場を利用し、なんらかの生活が行われていたことが試掘調査で明らかになっている。一の郭北側に特に小さな平場群が広がっており、これを仮称北の郭(1～3)とした。なお、一の郭に隣接する露頭岩地域(C)では平場が造成されていないため生活跡を認めることは困難であるものの、東側端部に立つと図版3に示したように羽地内海を望む高所となる。羽地内海は「かんてな」の名前で知られる重要港湾が機能しており、当該地域には親川(羽地)グスクを中心に今帰仁城に対峙したと考えられる羽地地域が広がっていた。このため生活を示す痕跡こそないものの、シイナグスクにとっては重要な眺望地として選択されていたと考えられる。このCの東側にも段々畑跡が残されており狭小な平場空間(D)が斜面地に認められる。試掘調査の結果包含層が確認されなかったことを考えると、後世になって平場が畑のために造成されたもの、あるいは道跡などと考えられる。東側の状況は試掘調査や伐採などを行い比較的確認できたことも多いのだが、逆に西側の状況は森の中に埋もれておりその確認は容易でない。踏査の結果では石垣などの構築物は認められないものの、等高線の間隔が狭いことから分かるようになりかなり急傾斜となっている(E)。前章でも紹介したようにシイナグスクの西側には大井川が流れており自然の崖地が防御線として機能していたと考えられる。もう一点北の郭の更に北側についても現状では草木にかくれ、判断できないが本地域の確認は重要である。いずれにせよ伐採がシイナグスクの広範な地域全てにおいて実施しているわけではないため、詳細調査が今後の課題となる。

平場についてこれまで述べてきたが、一方では平場にするものの困難であった岩場、露頭岩が目立つのも本グスクの特徴である。あるいはこの完全に平場化していないという点にこそ築城途上で廃城になったとする伝説を示唆する証拠の一つになるかも知れない。しかし、今帰仁城跡にも露頭岩が発達した郭として大隅が知られており、他の中南部のグスクにおいても平場の少ないグスクも多いと考える。この点においては城塞として整備される今帰仁城跡のような事例こそ希少で、シイナグスクのような平場の少ない、自然地形を多く残すグスクの数の方が多いのかも知れない。

シイナグスクで興味深いものは、平場空間は露頭した岩盤に囲まれるが、平場空間と隣接する平場空間を結ぶように各平場へ岩山を越えることなく露頭岩と露頭岩の間を通り各郭へ行くことができる点である。例えば矢印で示した各通路は、人の背丈くらいの岩が右左にそびえ、その狭い岩盤の間を抜けて次の平場空間へと至るのである。

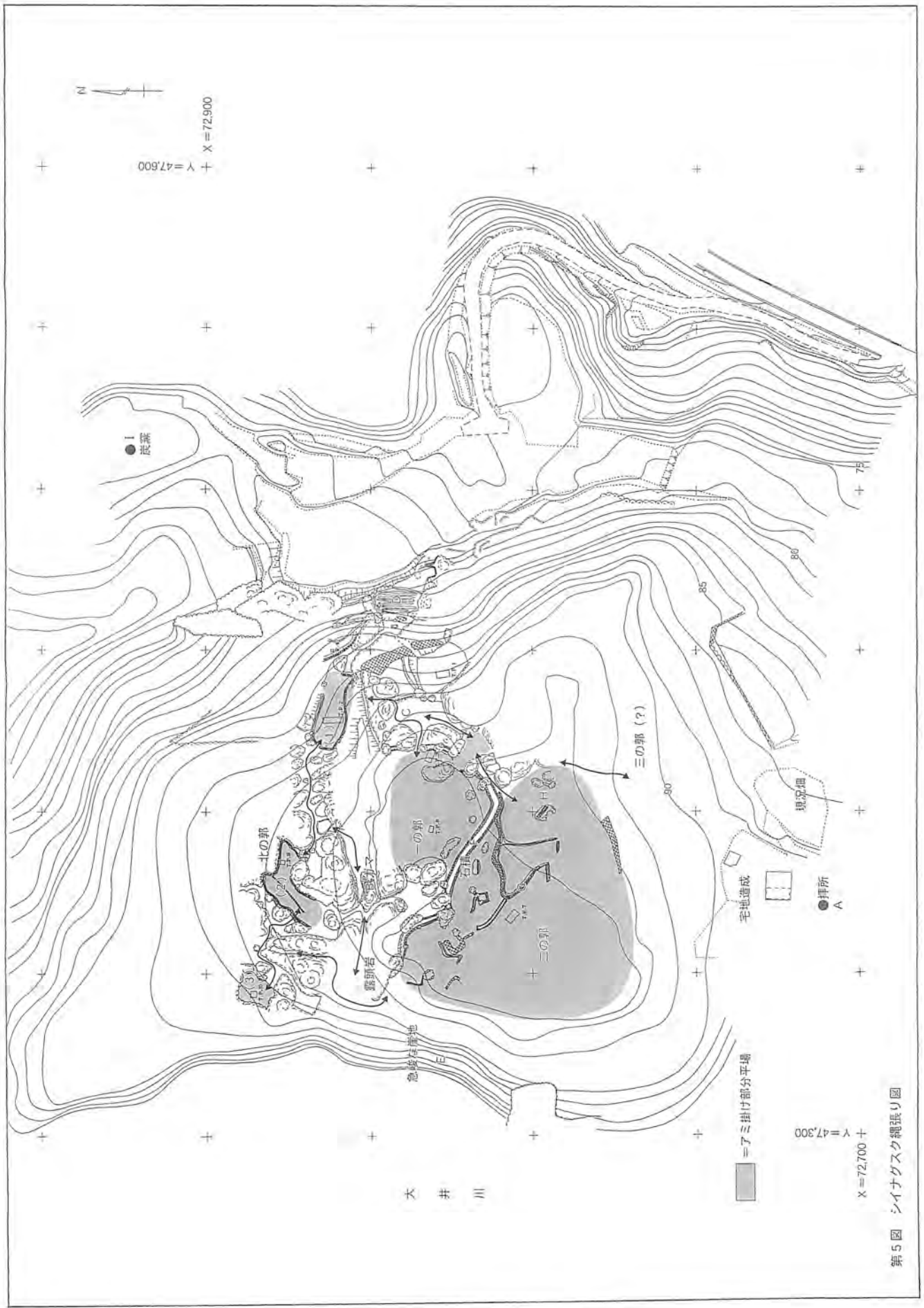
シイナグスクの石積みはいわゆる野面積みの石積みで、比較的規模の大きいものは一の郭と二の郭を遮断する一定の高さで築かれた石積みである(F)。概略高さ約1m前後で幅は2mである。ほとんど高さが無く馬の背状に山なりに崩れる場所も少なくない。岩盤と岩盤を繋ぐように延長約50m残るが、先の調査記録などによると150mほど積まれるとされる(新城1982)。保存のよい箇所約5mを図化した(第14図)。また、T.P.3では石積みの基礎の状況を確認することを目的に試掘調査を実施した。しかしこの箇所では岩盤に直接根石が設置されており、石積み遺構の年代的な推定ができるような成果は得られなかった。石積みの石材は基盤層である古期石灰岩からなり、転落石を雑に積んで石塁としたように見られる。立面図(第14図)で見るように、面石は多少大きい石を選択する程度で、面の加工や目地の意識などには乏しい。また、栗石は面石に対して小礫を利用している。立面図左側に露頭岩が認められるが、この露頭岩の頂部まで積み上げており、石積み全体としても露頭岩隙間を埋めるように礫が集められたという印象を受ける。この石積みについて、構築年代を想定するためにT.P.3の試掘坑を設けた。しかし残念ながら年代を判断できる調査結果を得ることは出来なかった(第10図)。さらに二の郭内にも石積みが認められるがいずれも低い石積で平場を区画した土留め状の石積み(G)と思量される。石積みの中には岩盤の上に小積みされたもの(H)もある。いずれも基本的には岩盤と岩盤を繋ぐように、あるいは岩盤そのものを強調するように積まれたものであるのが特徴である。これらの石積み全てがシイナグスクの機能していた時代の構築物と考えるのは早計で、畑が耕作されていた近代から現代の構築物である可能性もあるため詳細な検討が望まれる。

石積以外の遺構としてT.P.6・7・8の3地点においてピットが確認された。一般的にはこのようなピットは柱穴と考えられるが、建物跡としてプランを復元できたものは無い。いずれも一の郭、二の郭と仮称した地点に集中し、地表面から遺構検出面までの深度は浅い。

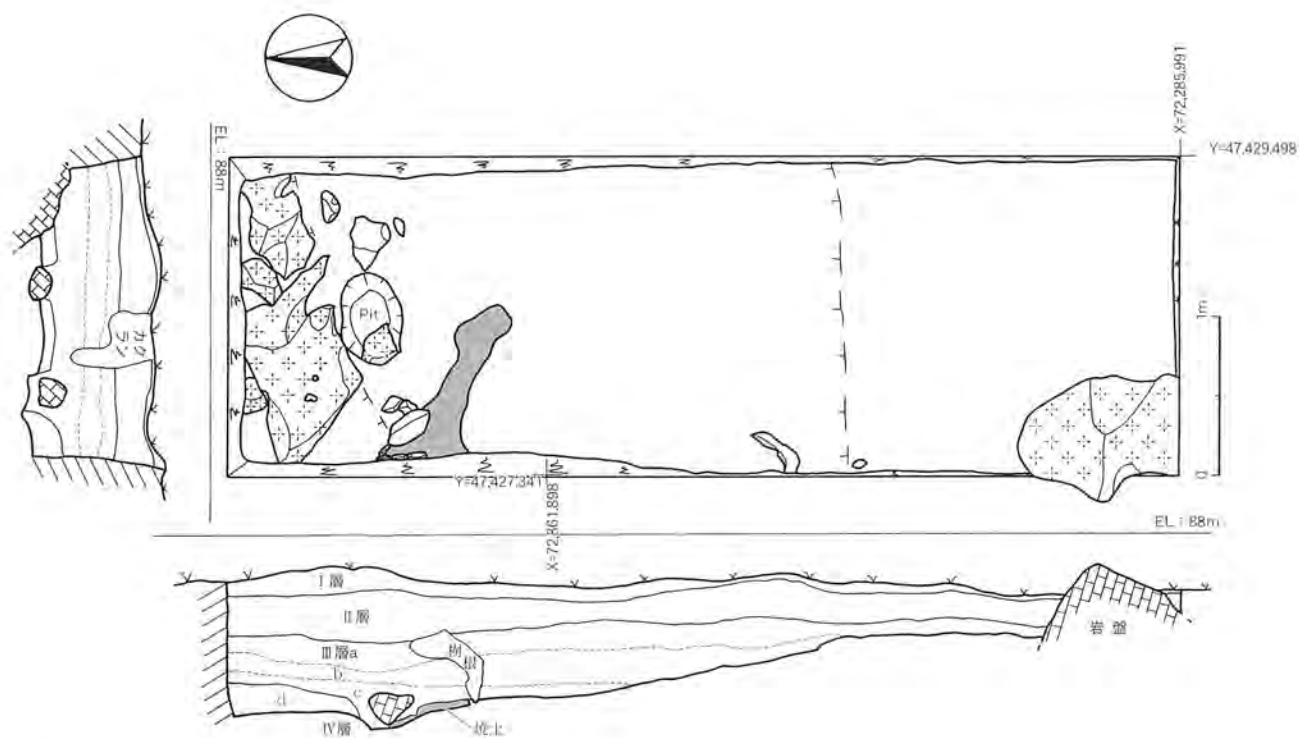
他にも、保存状態良好な形で確認できた遺構として炉跡がある。T.P.10で確認された炉跡は、炉壁が垂直に立ち上がり平面観円形の遺構で、直径約90cm、深さ約40cmを計る。炉底直上には大量の炭が堆積し、炭層となる。炉跡内覆土上層ではあまり炭が含まれず、中層からは炭と炉壁の残欠と考えられる焼土が混在しており、この焼土塊には枝や竹、草などの植物質圧痕が認められる。

いずれにせよシイナグスクの平場空間を構成する要素は、露頭岩や自然崖、土留め状の石積みによって区画され、各郭群を回ることができるように小道があるということが分かった。特に従来から知られていた一の郭と二の郭からは柱穴と推定されるピットが確認され、恒常的な生活を推測することの出来る材料を得ることができた。他にも北の郭として認識した平場群では炉跡を検出することに成功している。全体的な印象として、築城の度合いとしては、あまり手の掛けられていない自然地形に近いグスクの印象が強い。このことから本グスクを城塞的なグスクと呼ぶには、あまりにも自然地形を多く残していると言うことができるものの、逆に集落的な要素としては不便な高地を選択したと考える。

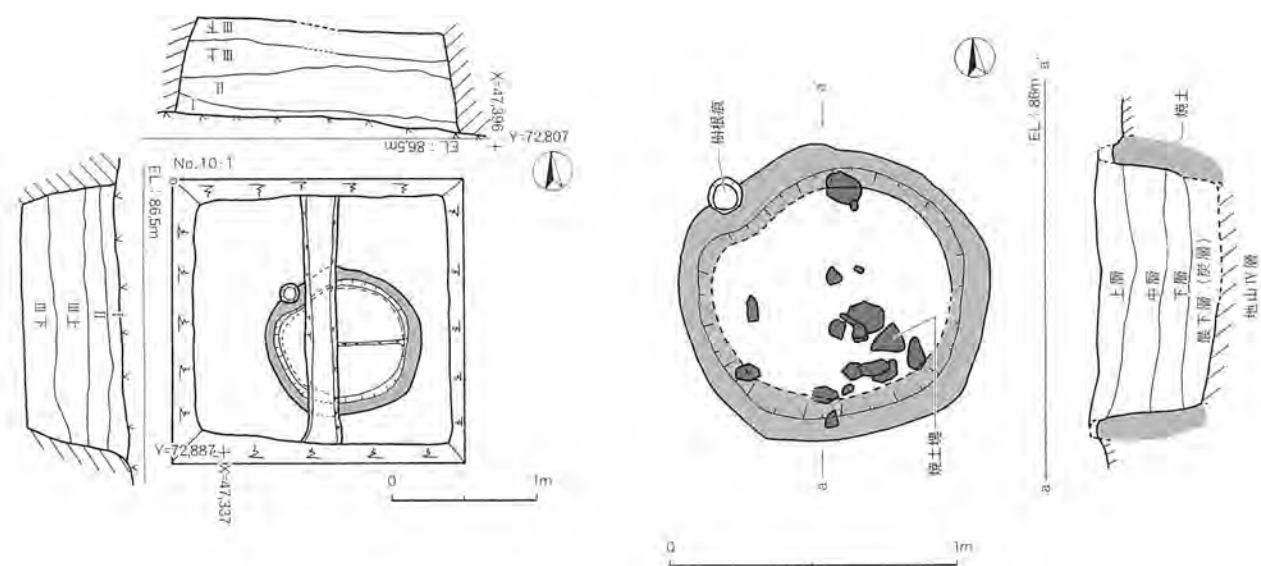
なお、(I)には近現代に利用されたと考えられる炭窯跡が確認できた。



第5図 シイナグスク縄張り図

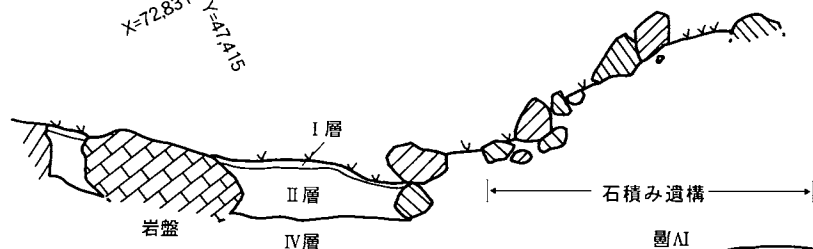
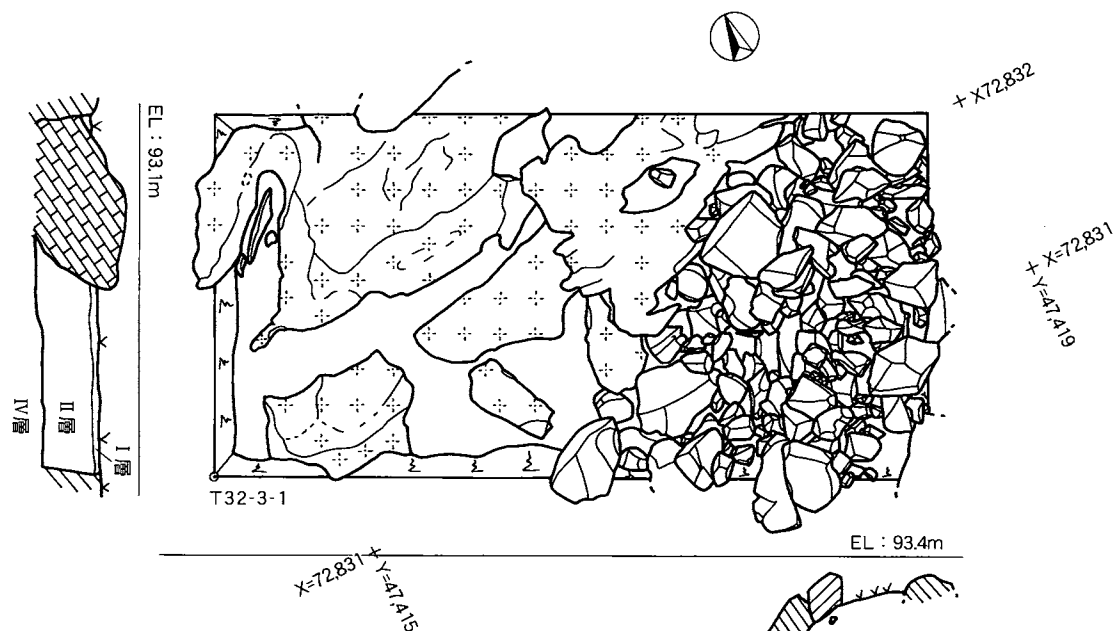


第7図 T.P.2

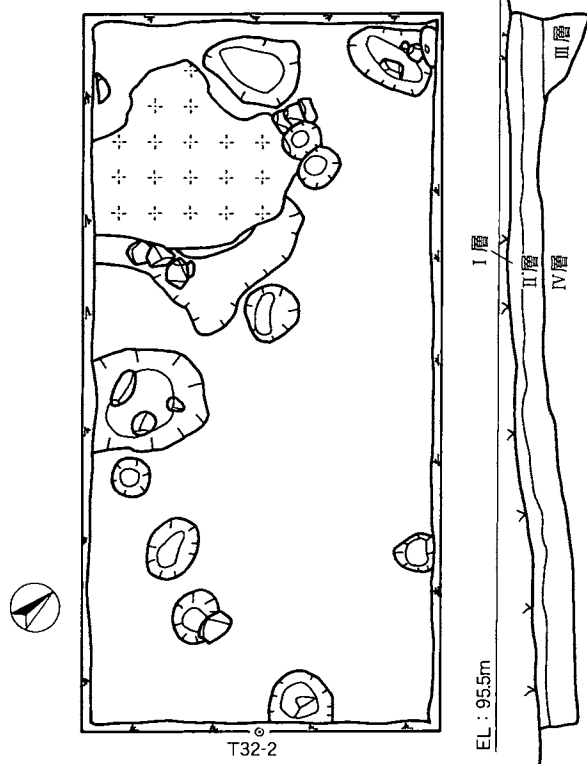
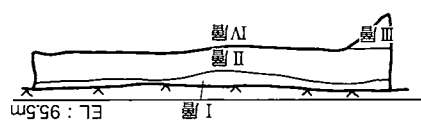


第8図 T.P.10

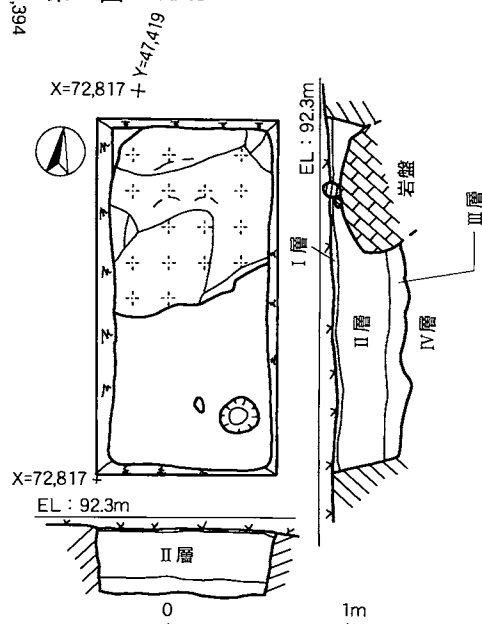
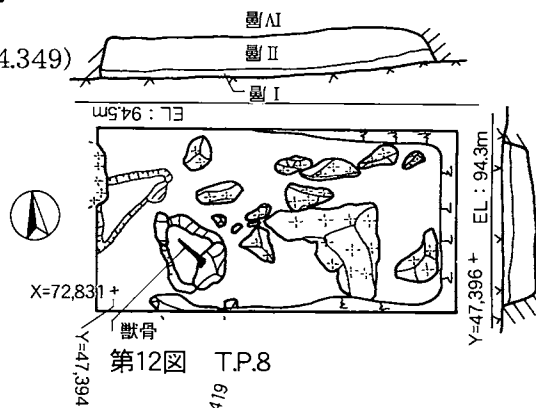
第9図 炉跡詳細図



第10図 TP.3 (T32-3-1 X=72,831.745 Y=47,414.349)

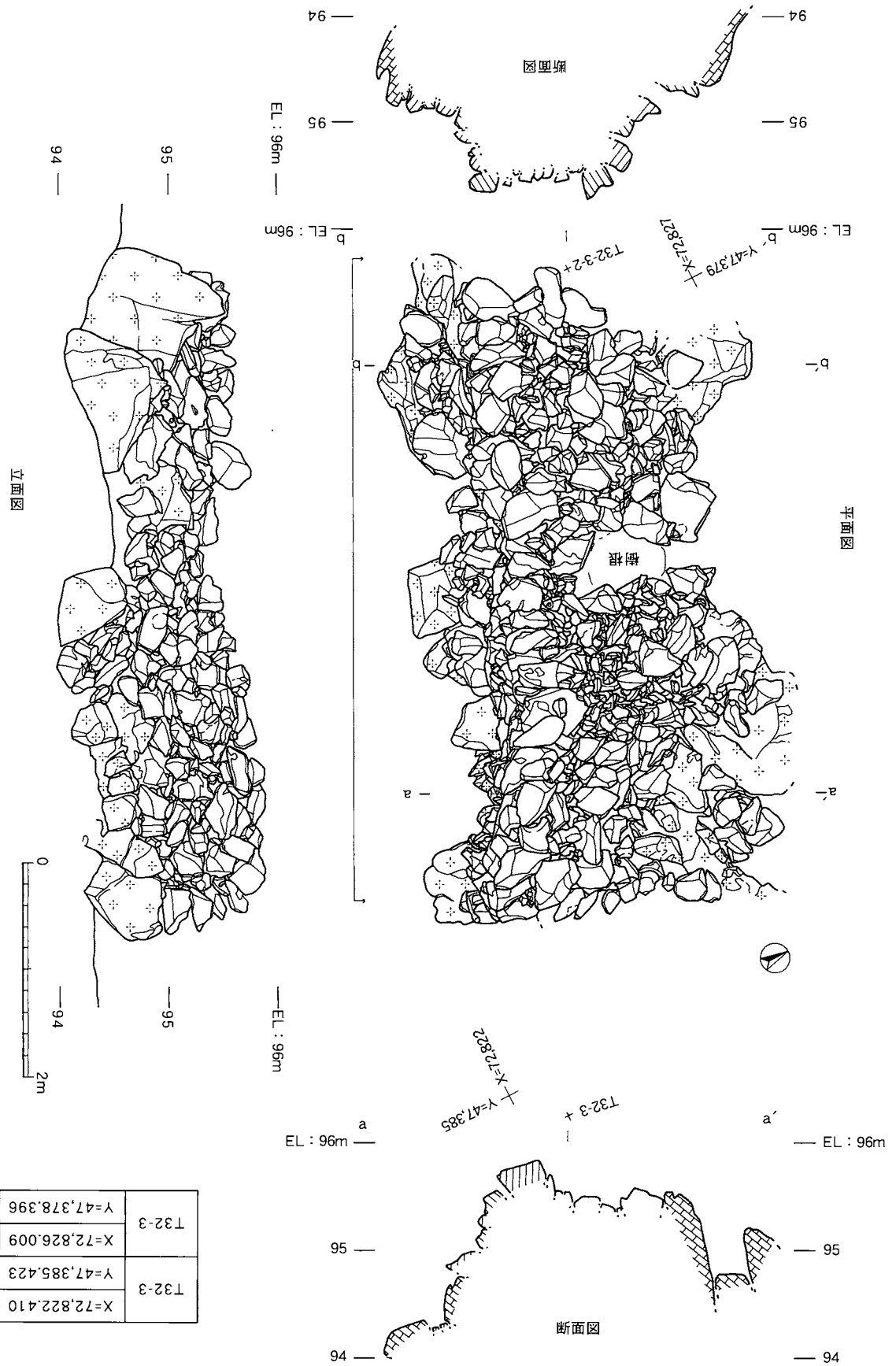


第11図 TP.7 (T32-2 X=72,805.355 Y=47,369.965)



第13図 TP.6

第14図 一の郭 石積詳細図 (部分)



第IV章

遺 物

1 はじめに

今回の試掘調査では土器を主体に中国陶磁とカムイヤキ須恵器、石器が出土している。またこの他にも近・現代の薬瓶や沖縄産陶器、本土産磁器などの近・現代遺物なども表採されているが、これについては省略する。本来ならば、各調査地点は20～50m離れていることを考えれば、調査区毎に報告することが必要であると考え。しかし各調査地点の面積が小さいため遺物が小片であることや、各調査地点から得られた遺物の時間的なまとまりが認められる事を考え、全ての調査区のことを遺物毎に報告する方法を採用した。

出土した遺物は全調査区の総数で2,600点余（破片数）である。いずれも小片となる。出土点数を口縁部破片数で見ると、土器が113点（82%）を数え、青磁17点（12%）、白磁7点（5%）、カムイヤキ1点（1%）となる。これを器種毎に概観すると貯蔵具、煮沸具、供膳具に大別され、主に須恵器は貯蔵具に、煮沸具は土器を、供膳具は陶磁器を主体的に利用していることが分かる。具体的数字で見ると貯蔵具としては土器の壺、甕、カムイヤキの壺？で構成され、およそ37%となる。煮沸具と推測される鍋（浅鉢）は土器のみで41%を占める。碗・皿類の供膳具は22%を占め内訳は土器碗（8%）・青磁碗（8%）・青磁皿（2%）・白磁碗（1%）・白磁皿（3%）となる。

石器は表採資料が多いためグスク時代の遺物に伴うものか、あるいは近代以降に何らかの形で利用されたものかを判断することは難しい。しかし、これまでの発掘事例などから考えて本章で紹介する。器種としては主に敲打具と磨石・砥石類が採集されている。表採された箇所については石積みなどの石材に混ざっていることもあった。

表2 シイナグスク出土遺物集計表

		土器							カムイヤキ		青磁碗						青磁皿		白磁碗		白磁			骨		
		口縁	頸部	胴部	底部	口縁	胴部	石器	竊蓮弁文			劃花文		無文		口縁	胴部	口縁	胴部	口 禿			魚	獣		
									口縁	胴部	底部	口縁	胴部	口縁	胴部					口縁	胴部	口縁			胴部	
T.P.1																									0	
T.P.2	表採・I層	3		51	5		1			1															61	
	Ⅱ	2		17	1	1	3		1															25		
	Ⅲ	45	7	832	44		3	1	3	2									2	1			4	944		
	Ⅳ (Ⅲd)			9	2																			11		
T.P.3	表採・I層	1		53						2															56	
	Ⅱ	9	2	323	10		10	3	1	4	1						1					7	6	377		
T.P.4																								0		
T.P.5				1																				1		
T.P.6	表採・I層			22																				22		
	Ⅱ			27			1																	28		
	Ⅲ			1																				1		
T.P.7	表採・I層			10																				10		
	Ⅱ			15						1										2	1			19		
	遺構内			8			1																	9		
T.P.8	表採・I層			1																				1		
	Ⅱ		1	37			4													2	2			46		
T.P.9	表採・I層	4		90	5	3			2						1									105		
	Ⅱ	31	3	539	39	6	4	4	4	1	1	2		3	2	1	1				1			642		
	Ⅲ	15		78	9				1	1	1							1						106		
T.P.10	表採・I層			1																				1		
	Ⅱ	1		25	2		2		2									1						33		
	Ⅲ	2		98	2																			102		
	Ⅳ (Ⅲd)			4																				4		
表採								4					1											5		
合計	2,609	113	13	2242	119	1	34	12	12	17	3	1	2	1	3	3	1	1	3	6	4	1	11	6	2,609	

2 土器

いわゆるグスク土器・グスク系土器と呼称される土器群で、グスク遺跡から出土するグスク時代の沖縄諸島の在地土器である。概して器壁が5mm前後の薄造りとなり、明赤褐色から橙色でやや明るい器色である。全体的に器面調整は徹底せず、やや器表面に凹凸が残る。器種は器高に比して口径が広く、体部中央でふくらみ口縁部が内傾する鍋（浅鉢）形土器。口縁部は外反させ肩部がやや張る甕形土器。口径が10～15cm前後で壺形になる壺形土器。これらの器種に中国陶磁の口禿皿を模したと考えられる碗形の土器が出土する。いずれも今帰仁村の当該期の遺跡で確認することのできる在地土器と類し、特に今帰仁城跡などを中心に出土する土器の胎土と近似する。中でも混和材に粘板岩を砕いたものを用いる点に特徴がある。

第15図は鍋（浅鉢）形の土器で、1は口縁端部をナデ平坦にするとともに、やや外側を肥厚させる。2・7などは端部をナデ平坦にするが、この他に図示したいずれの資料も口縁端部のナデは徹底せずに断面舌状となる。6に見られるように一般的には口縁部付近に浅い指頭押圧が残り、胴上半のナデ調整は徹底せず、器内外に粘土紐接合時の接合痕が器表面で確認できる。文様は施さない。器全形を伺える資料は本調査では得られていないため胴下半については不明である。当該器種は本調査での出土土器の主要器種となる。分類することのできた陶磁器を含む器種のうちおよそ40%が鍋（浅鉢）形土器である。

第16図－13～17は甕形土器である。13は肩の張らない器形に口縁部を折る特徴的な資料である。口縁外面に指頭圧痕が残る。14～17はやや肩の張る器形に口縁端部を小さく折る器形である。甕形土器はいずれの資料も小破片であるため、甕として扱ったが底部まで伺えないため判然としない。あるいは今後の検討によっては口径の広い壺または口縁端部を折る鉢形土器と理解することも出来る。

同図18～21は壺形土器で、小破片のためこれも判然としないが、口径に大小認められるようである。口縁部と外反させる18・19の資料と、20・21のように直口する資料が認められる。21は口縁を若干肥厚させる特徴も持つ。

同図22～26は碗形土器でやはり小破片資料で出土するため詳細は不明である。口径が9～13cm程度になること等から碗形土器とした。明瞭に外反する特徴を持つ資料は無く、やや内傾するような印象を持つ。糸数グスクの調査では碗形Ⅱb類とした資料を白磁口禿皿を模したものとしており、中国陶磁の模倣を指摘する（玉城村教育委員会1991）。

第17図－27～30は1類とした。土器を据えたとき床に密着し、底部から胴部への立ち上がりに明瞭な角を持つ資料である。31～35は2類底部とした。1類と同様の器形だが1類よりはやや薄手の造りとなり、底部は若干上げ底状となり床に接しない。36・37は3類底部とした。底部から胴部への立ち上がりはやや丸くなるがやはり1・2類と近似する特徴の資料である。38～41は4類とした。立ち上がりは丸く角が無く、いわゆる丸平底の土器となる。41に見るように粗い調整痕を底に認めることができる。34・42は底面に葉痕を残す資料で、後者はクワズイモの葉脈痕が明瞭に認められる資料である。いずれの土器底部も口縁部で分類したいずれの器種に対応するのかは不明であるが、5類とした43・44はその底径の広さから碗形の底部資料と推定される。

表3 シイナグスク出土土器観察表

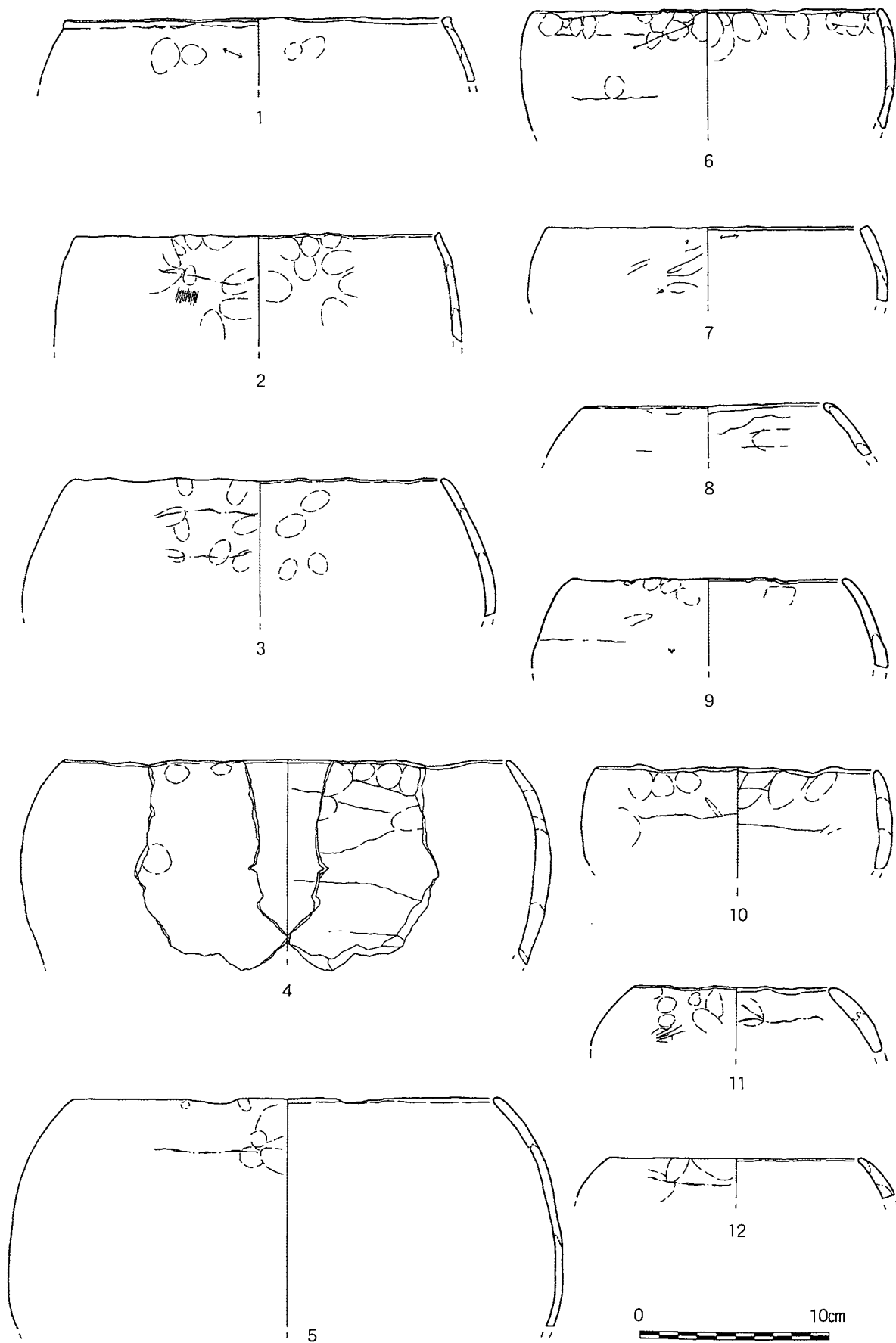
(単位=cm)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径	色調	胎土	調整 備考	出土地点	
								地点	層
第15図 図版24 1	土器	鍋 (浅鉢)	口縁部	20.6 - -	明赤褐色 (5/8)	胎土は細かい。石英、粘板岩を混入。	口縁部にふくらみ。両面とも指圧痕が残る。外面にはナデ。	T.P.2	Ⅲ
" " 2	"	"	"	19.0 - -	橙色 (6/6)	胎土は細かい。石英、粘板岩など大小多量に混入。外面はススで黒くなっている。	口縁部は波状に成形。両面とも指圧痕が残る。外面にはナデとヘラ(?)の後も残る。雑なつくり。(凹凸がある。)	T.P.9	Ⅲ
" " 3	"	"	"	19.8 - -	橙色 (7/6)	胎土は細かい。石英、粘板岩など大小多量に混入。内面はススで黒くなっている。	両面に指圧痕とわずかなナデが残る。輪積みのつなぎ目がはっきりと残る。	T.P.9	Ⅲ
" " 4	"	"	"	23.9 - -	明赤褐色 (5/8)	胎土は細かい。石英、粘板岩が混入。	両面に指圧痕とナデがわずかに残る。	T.P.2	Ⅲ
" " 5	"	"	"	22.9 - -	橙色 (6/8)	胎土は細かい。石英、粘板岩が混入。外面はススで黒くなっている。	外面に指圧痕とナデがわずかに残る。	T.P.2	Ⅲ
" " 6	"	"	"	18.6 - -	明赤褐色 (5/8)	胎土は細かい。石英、粘板岩の鉱物が混入。	両面に指圧痕が残る。	T.P.2	Ⅲ
" " 7	"	"	"	17.0 - -	にぶい橙色 (6/4)	胎土は細かい。粘板岩が混入。	外面にヘラ痕と内面にナデ痕が残る。	T.P.3	Ⅱ
" " 8	"	"	"	12.7 - -	橙色 (6/6)	胎土は細かい。粘板岩が混入。外面にススが付着。	口縁部内まげ。両面に指圧痕がわずかに残る。	T.P.2	Ⅲ
" " 9	"	"	"	14.6 - -	にぶい橙色 (7/4)	胎土は細かい。粘板岩や有色鉱物が混入。	両面に指圧痕が残る。外面に輪積み痕が残る。	T.P.3	Ⅱ
" " 10	"	"	"	15.0 - -	にぶい黄橙色 (7/4)	胎土は細かい。大小の粘板岩が混入。	両面に指圧痕が残る。	T.P.2	Ⅱ
" " 11	"	"	"	10.8 - -	浅黄褐色 (8/6)	胎土は細かい。大小の粘板岩が混入。外面にスス付着(?)	両面に指圧痕と外面にナデも残る。内面に輪積み痕が残る。	T.P.2	Ⅲ
" " 12	"	"	"	13.6 - -	明赤褐色 (5/6)	胎土は細かい。大小の粘板岩(ほとんどが砂状)が混入。両面にスス付着。	両面に指圧痕が残る。	T.P.2	Ⅲ
第16図 図版25 13	"	甕	"	19.9 - -	灰黄色 (7/2)	胎土は細かい。大小の粘板岩が混入。	外面口縁部に指圧痕が残る。内面はなだらかで丁寧に仕上げている。	T.P.2	Ⅱ
" " 14	"	"	"	12.9 - -	にぶい赤褐色 (5/4)	胎土は細かい。大小の粘板岩が混入。	口唇部は平らかで方形に成形。	T.P.2	Ⅲ
" " 15	"	"	"	10.8 - -	橙色 (6/6)	胎土は細かい。粘板岩が混入。	(外)指圧痕。 (内)ヘラによる成形。	T.P.9	Ⅱ
" " 16	"	"	"	10.4 - -	にぶい赤褐色 (4/4)	胎土は細かい。砂状の粘板岩と石英が混入。	薄く仕上げる。	T.P.9	I
" " 17	"	"	"	9.9 - -	橙色 (7/6)	胎土は細かい。粘板岩が混入。	薄く仕上げる。	T.P.2	Ⅲ
" " 18	"	壺	"	15.5 - -	橙色 (7/6)	胎土は細かい。大きめの粘板岩が多量に混入。	両面に指圧痕。外面頸部につなぎめ。	T.P.9	Ⅱ
" " 19	"	"	"	9.4 - -	灰黄色 (7/2)	胎土は細かい。大きめの粘板岩が多量に混入。	両面に指圧痕。輪積み痕が残る。	T.P.3	Ⅱ
" " 20	"	"	"	14.4 - -	明赤褐色 (5/8)	胎土は細かい。大小の粘板岩が多量に混入。	両面に指圧痕がわずかに残るが、なだらかで丁寧に仕上げている。	T.P.10	Ⅲ
" " 21	"	"	"	7.0 - -	橙色 (6/6)	胎土は細かい。大小の粘板岩が混入。(1.3cm大のものもあり。)内面頸部より下はスス付着。	器厚が薄い。両面に指圧痕が残る。	T.P.3	Ⅱ

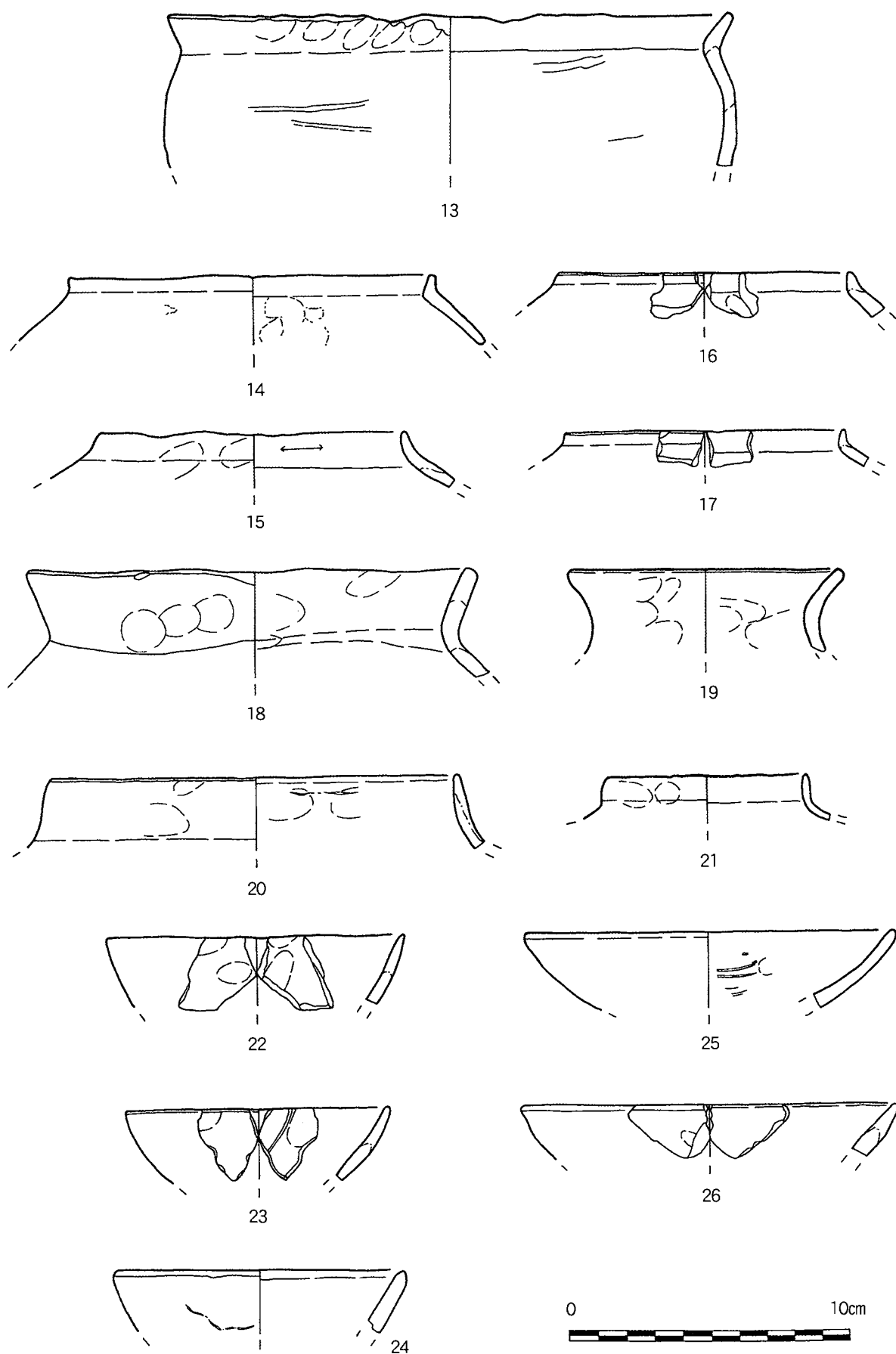
表4 シイナグスク出土土器観察表

(単位=cm)

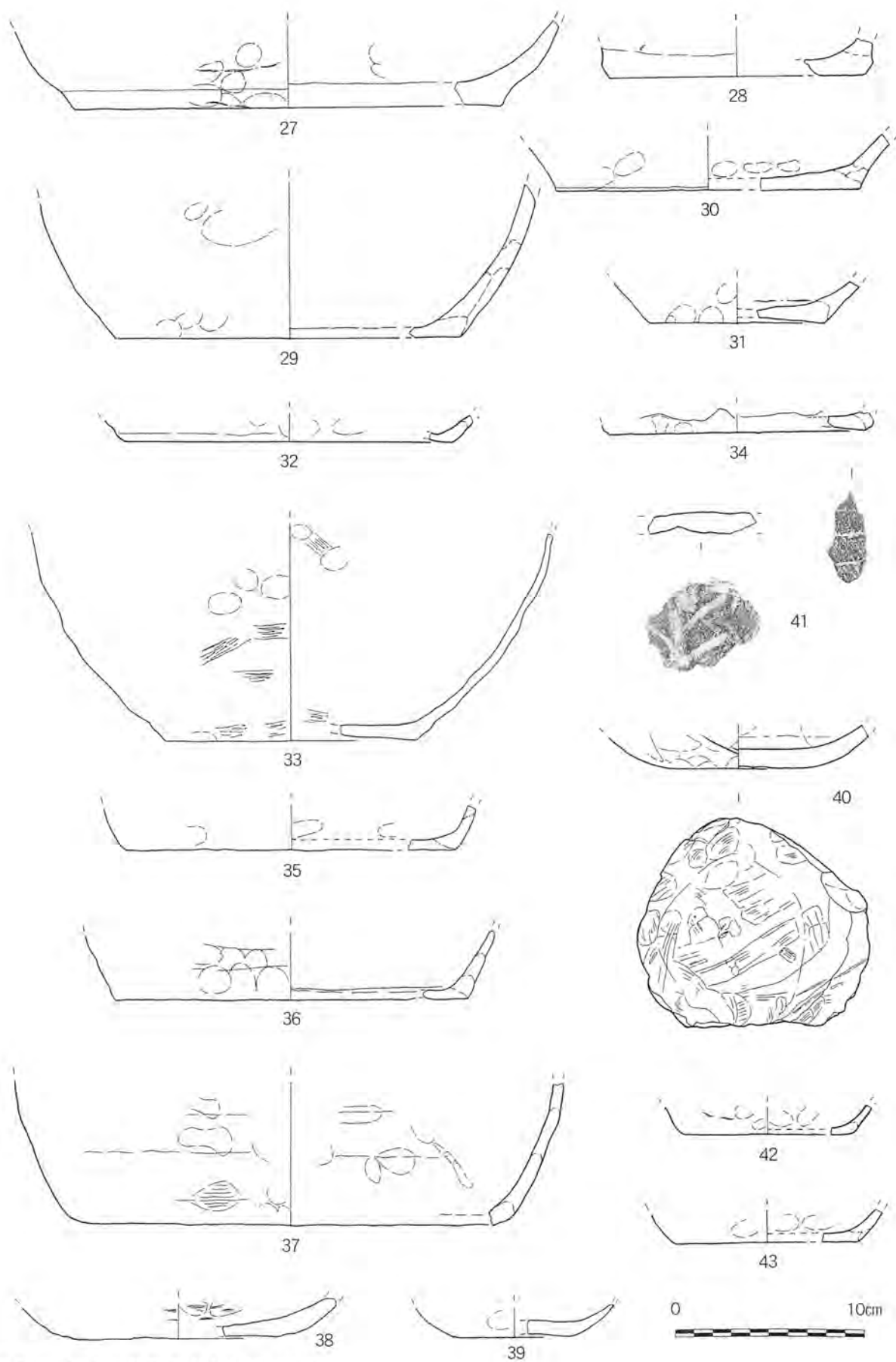
挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径	色調	胎土	調 備 整 考	出土地点	
								地点	層
第16図 図版25 22	土器	碗	口縁部	10.5 - -	にぶい黄橙 色(7/4)	胎土は細かい。大小の粘板岩が混入。	両面に指圧痕が残る。なだら かで丁寧に仕上げる。	T.P.3	Ⅱ
" " 23	"	"	"	9.2 - -	橙色(6/6)	胎土は細かい。大小の粘板岩が混入。	両面に指圧痕が残る。なだら かで丁寧に仕上げる。	T.P.2	Ⅲ
" " 24	"	"	"	10.2 - -	浅黄橙色 (8/4)	胎土は細かい。大小の粘板岩が混入。	両面に指圧痕が残る。なだら かで丁寧に仕上げる。	T.P.2	Ⅲ
" " 25	"	"	"	13.0 - -	明赤褐色 (5/8)	胎土は細かい。砂粒と粘板岩が混入。	両面に指圧痕が残る。なだら かで丁寧に仕上げる。	T.P.2	Ⅲ
" " 26	"	"	"	13.2 - -	浅黄橙色 (8/4)	胎土は細かい。大小の粘板岩が混入。	両面に指圧痕が残る。なだら かで丁寧に仕上げる。	T.P.3	Ⅱ
第17図 図版26 27	"	1類	底部	- - 18.5	にぶい橙色 (7/4)	大小の粘板岩が多量に混入。 内面にススが付着。(断面に も)	両面に指圧痕。外面腰部を特 に押さえつけ、高台のように 成形する。	T.P.2	Ⅲ
" " 28	"	"	"	- - 13.5	明赤褐色 (5/6)	胎土は細かい。大小の粘板岩 が多量に混入。外面底部にス スが付着。	外面腰部を指圧し、高台を作 り出している。底部は面取り されている。	T.P.2	Ⅱ
" " 29	"	"	"	- - 13.6	橙色(6/8)	胎土は細かい。大小の粘板岩 と石英が混入。外面底部にス スが付着。	器壁が厚いのに対し、底部は かなり薄く成形している。	T.P.2	Ⅲ
" " 30	"	"	"	- - 16.2	橙色(6/8)	胎土は細かい。砂粒と石灰質 鉱物が混入。内面底部にスス 付着。	両面に指圧痕。	T.P.2	Ⅱ
" " 31	"	2類	"	- - 9.3	橙色(7/6)	胎土は細かい。砂粒と粘板岩 が混入。内面底部にスス付着。	外面に指圧痕。	T.P.2	Ⅲ
" " 32	"	"	"	- - 17.7	橙色(6/6)	胎土は細かい。砂粒と粘板岩 が混入。内面にスス付着。	両面に指圧痕。	T.P.2	Ⅲ
" " 33	"	"	"	- - 22.9	浅黄橙色 (8/6)	胎土は細かい。砂粒と粘板岩 が混入。内面にスス付着。	外面にヘラによる調整痕。	T.P.10	Ⅱ
" " 34	"	"	"	- - 13.6	橙色(7/6)	胎土は細かい。砂粒と粘板岩 が混入。外面にスス付着。	外面に指圧痕。	T.P.2	Ⅲ
" " 35	"	"	"	- - 17.0	橙色(7/6)	胎土は細かい。大きめの粘板 岩を混入。	内外に指圧痕。	T.P.9	Ⅱ
" " 36	"	3類	"	- - 19.0	橙色(7/6)	胎土は細かい。大きめの粘板 岩を混入。底部にスス付着。	外面に指圧痕。外面底部に一 部面取りを施す。内面は比較 的なだらか。	T.P.9	Ⅱ
" " 37	"	"	"	- - 22.0	(外)橙色(6/8) (内)にぶい褐色 (5/3)	胎土は細かい。大きめの粘板 岩を混入。	外面に凹凸が残る。内面は比 較的なだらか。	T.P.2	Ⅲ
" " 38	"	4類	"	- - 10.7	(外)橙色 (7/6)(内)褐 灰色(5/1)	胎土は細かい。粘板岩が混入。	外面にヘラ痕。焼成はやや不 良。	T.P.3	Ⅱ
" " 39	"	"	"	- - 5.8	橙色(6/6)	胎土は細かい。粘板岩が混入。 外面にスス付着。	外面にヘラ痕。	T.P.3	Ⅱ
" " 40	"	"	"	- - 7.6	橙色(6/6)	胎土は細かい。砂粒と粘板岩 を混入。外面にスス付着。	外面にヘラ痕が残る。	T.P.2	Ⅲ
" " 41	不明	不明	"	- - 8.8	橙色(7/6)	胎土は細かい。砂粒と粘板岩 を混入。外面にスス付着。	外面に植物の葉痕。	T.P.2	Ⅲ
" " 42	土器	碗?	"	- - 8.9	にぶい黄橙 色(6/4)	胎土は細かい。砂粒と粘板岩 を混入。外面にスス付着。	器厚は薄い。	T.P.3	Ⅱ
" " 43	"	"	"	- - 8.9	橙色(7/6)	胎土は細かい。砂粒と粘板岩 を混入。断面の一部にスス付 着?	外面に指圧痕。焼成はやや不 良。	T.P.3	Ⅱ



第15図 シイナグスク出土土器（鍋形土器）



第16図 シイナグスク出土土器 (13~17: 甕、18~21: 壺、22~24: 碗)



第17図 シイナグスク出土土器（底部）

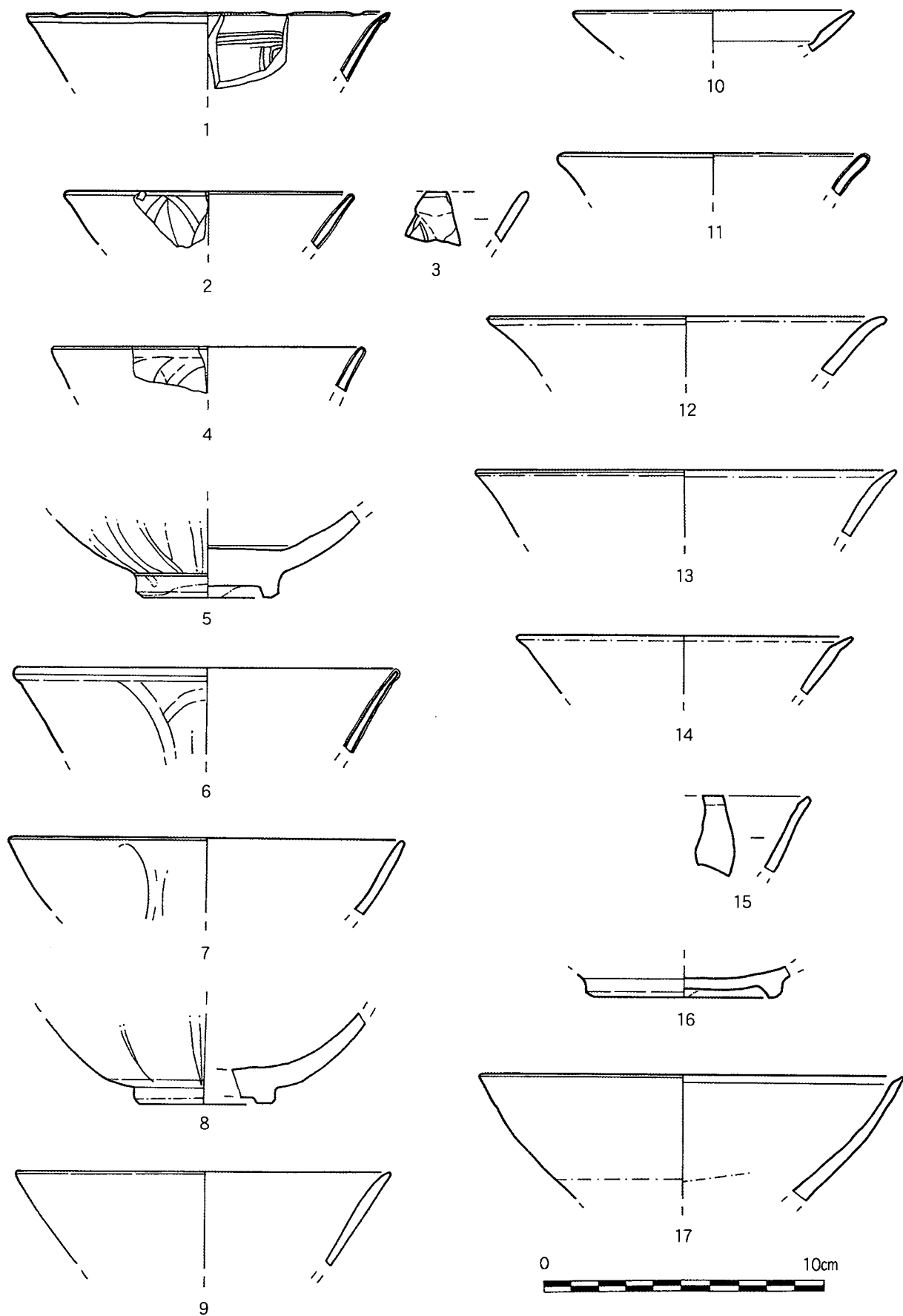
3 陶磁器

第18図は、いずれも中国産の輸入陶磁である。青磁は龍泉窯系の碗、同安窯系の皿が出土している。1は龍泉窯系の青磁劃花文碗で口縁部を輪花状に刻み、内体部には片切彫りによる区画文を施す。外体は無文となる。2～5は龍泉窯系の青磁鎬蓮弁文碗で鎬の明瞭な蓮弁を外体部に配す。5は底部資料である。6～8も龍泉窯系の青磁蓮弁文碗で鎬は明瞭でなく線描きした単純な文様となる。9は小破片ではあるが、釉調などから龍泉窯系の無文碗と思量される。いわゆる鎬蓮弁文碗は大宰府編年Ⅰ-5b類とする資料で、年代的には13世紀初頭頃から出現すると理解されている（横田・森田1978）。

表5 シイナグスク出土陶磁器観察表

(単位=cm)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	分類	口径 器高 底径	素地	色調・施釉	文様	出土地点	
								地点	層
第18図 図版27 1	青磁	碗	劃花文	12.8 - -	灰白色 (7/1) 微粒子	明緑灰色(6/1)の透明釉を両面に施釉。貫入なし。	口縁部を刻む輪花碗。いわゆる龍泉窯系の劃花文碗、内面を区画する片切彫りの文様が認められる。	T.P.9	Ⅱ
" 2	"	"	鎬蓮弁	10.2 - -	灰白色 (8/1) 微粒子	オリーブ灰色(6/1)の失透釉を両面に施釉。貫入なし。	外面に片切彫りによる鎬蓮弁文。	T.P.9	Ⅱ
" 3	"	"	"	9.8 - -	灰白色 (7/1) 微粒子	オリーブ灰色(6/2)の失透釉を両面に施釉。貫入あり。	口縁部はやや肥厚。外面に片切彫りによる鎬蓮弁文を描く。	T.P.2	Ⅲ
" 4	"	"	"	9 - -	灰白色 (7/1) 微粒子	緑灰色(6/2)の透明釉を両面に施釉。口禿。内面に粗い貫入あり？	外面に片切彫りによる鎬蓮弁文。	T.P.10	Ⅱ
" 5	"	"	"	- 8.8	灰白色 (7/1) やや粗粒子	灰オリーブ色(5/3)の透明釉を両面に施釉。畳付から高台内側には無釉。内底に重ね焼きの痕あり。粗い貫入あり。	内底に1本の圈線。外面に片切彫りによる鎬蓮弁文。	T.P.9	Ⅲ
" 6	"	"	蓮弁文	13.6 - -	灰白色(7/2) やや粗粒子	オリーブ灰色(6/1)の失透釉を両面に施釉。貫入なし。	口縁部玉縁。外面に曲施文具による線彫りによる鎬蓮弁文。	T.P.9	Ⅱ
" 7	"	"	"	14 - -	灰白色 (7/2) 微粒子	灰オリーブ色(5/3)の失透釉を両面に施釉。貫入あり。	外面に片切彫りによる無鎬蓮弁文。外面、胴部には櫛描きによる文帯。	T.P.9	Ⅲ
" 8	"	"	"	- 4.75	灰白色 (7/1) 微粒子	オリーブ褐色(4/4)の失透釉を両面に薄く施釉。畳付、外面から高台内側にかけて無釉。貫入あり。	外面に片切彫りによる無鎬蓮弁文	T.P.9	Ⅲ
" 9	"	"	無文碗	6.7 - -	灰白色 (7/1) 微粒子	緑灰色(6/1)の半透明釉を両面に厚く施釉。貫入なし。	文様なし。	T.P.3	Ⅱ
" 10	"	皿	同安窯系	9.8 - -	灰白色 (7/1) 微粒子	灰オリーブ色(6/2)の透明釉を両面に薄く施釉。口縁部内側は釉がやや禿げぎみ。貫入なし。	外面胴部に線彫りによる、1本の圈線あり。内面に深めの圈線有り。	T.P.9	Ⅱ
" 11	"	"	"	10.6 - -	灰白色 (8/1) やや微粒子	オリーブ灰色(6/1)の半透明釉を両面に薄く施釉しているが、全体的に剥けている。貫入なし。	文様なし。	T.P.9	Ⅱ
" 12	白磁	不明	口禿	14 - -	灰白色 (8/1) 微粒子	口縁部を除いて、灰白色(8/1)不透明釉を両面に薄く施釉。貫入なし。	文様なし。	T.P.2	Ⅲ
" 13	"	"	"	14.8 - -	灰白色 (8/2) 微粒子	灰白色(8/2)の不透明釉を両面に施釉。口縁部は除く。貫入なし。	文様なし。	T.P.2	Ⅲ
" 14	"	"	"	18.8 - -	灰白色 (8/1) 微粒子	明オリーブ灰色(7/1)の半透明釉を両面に施釉。口縁部は除く。貫入なし。	内面に一本の圈線あり。	T.P.7	Ⅱ
" 15	"	"	"	- -	灰白色 (8/1) 微粒子	明オリーブ灰色(7/1)の不透明釉を口縁部は除く両面に施釉。貫入なし。	文様なし。	T.P.8	Ⅱ
" 16	"	碗	"	- 6.45	灰白色 (8/2) 微粒子	灰白色(8/1)の不透明釉を両面に施釉。畳付と外側底部の一部は無釉。貫入あり。	文様なし。	T.P.9	Ⅱ
" 17	"	碗	粗製碗	15 - -	灰白色 (7/1) 微粒子	灰色(6/1)の透明釉を両面に施釉。両面とも腰部から下方へは無釉。貫入なし。	文様なし。福建省連江県浦口窯産粗製磁器(田中2003)、仮称今帰仁タイプ(金武2003)	T.P.9	Ⅱ



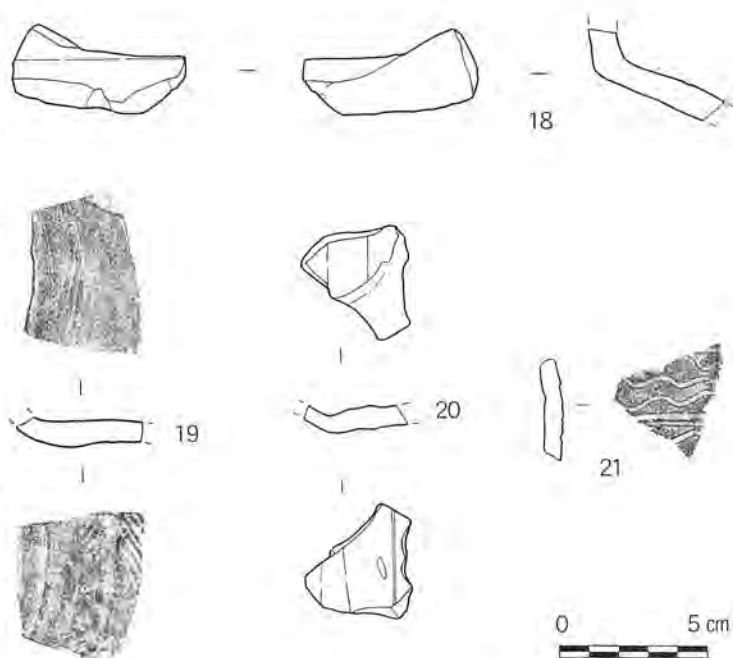
第18図 シイナグスク出土陶磁器（1～11：青磁、12～17：白磁）

10・11は底部こそ確認されていないが、同安窯系の無文皿と考えられる資料である。これも小破片であるため検討を要する。

白磁は口禿碗・皿及び福建省産粗製碗が確認されている。12～15は口禿の口縁部で、小片のため碗皿の器種分類は判断し難い。16は口禿の高台付き底部で碗皿が不明であるが、今帰仁城跡の出土事例ではベタ底の場合は皿で、高台が付く資料は碗が多いので碗と判断される（今帰仁村教育委員会1983）。17は粗製の碗で見込みと外底部を露胎とす。本調査の特徴として全体的に年代にまとまりがあり、およそ13世紀頃に限定される陶磁器で構成されている。また、一般的に多くのグスクで出土する無鎬蓮弁文碗や無文外反碗などこれに後続する青磁などが出土しない点は特筆される。

4 カムイヤキ須恵器

カムイヤキ須恵器は鹿児島県奄美郡島の徳之島伊仙町にある須恵器窯で生産された製品である。類須恵器（白木原1971）、中世須恵器（今帰仁村教育委員会1983）などと分類呼称される資料だが、前述した産地が判明した（伊仙町教育委員会1985 a b・2001）こともあり本報告ではカムイヤキ須恵器として報告する。全て壺形の小平で、新里（2003）分類のV式段階以降、吉岡（2002）分類の後期段階の特徴に該当するやや厚手で焼成不良な製品が主体となると思量される。第19図～18～21は壺形資料の頸部で、無文となる。21は胴部資料で波状文を施す資料である。



第19図 シイナグスク出土カムイヤキ須恵器

表6 シイナグスク出土カムイヤキ須恵器観察表

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径	色調	胎土	調備 整考	出土地点	
								地点	層
第19図 図版27 18	須恵器	壺	頸部	-	明赤褐色 (5/8)	外面は褐灰色(4/1)だがその表面だけで、内面は還元焼成?のため明赤褐色。砂粒混入。	外面は調整した痕。内面は凸凹。	T.P.3	II
" " 19	"	"	"	-	青灰色(6/1)	断面内部、少し還元。赤っぽい。両面とも堅く焼きしめる。砂粒混入。	外面はナデ調整が徹底する。ヘラなどで叩いた	T.P.9	II
" " 20	"	"	"	-	橙色(6/8)	全体的に還元焼成。やわらかい。砂粒混入。	器厚は薄い。内面はナデた痕。	T.P.2	II
" " 21	"	"	胴部	-	暗青灰色 (4/1)	焼成は比較的良好。砂粒混入。	外面に波状文と圈線を施す。内面は少し凸凹。	T.P.2	II

5 石器

少量だが石器が採集されている。表採品が多いという点では評価に苦慮する。いずれの資料も破損品である。第20図－1・2は大形の自然円礫を利用した石器で、礫突端部分に敲打痕が残ることから敲石などに利用されたと考えられる。3・4は定形的な長方形の石片で砥石や模造品などの小片と考えられるが用途は不明である。磨面が認められたため石器とした。5も用途不明の石器で、磨面が認められる。大きく破損しており、全形は伺うことができないが、磨石等の製品と考えられる。

表7 シイナグスク出土石器観察表

(単位=cm・g)

挿図番号 図版番号 枝番号	器種	最大長 最大幅 最大厚	重量	観 察 所 見	出土地点	
					地点	層
第20図 図版28 1	敲石	15.6 8.3 7.3	1,250	自然円礫を用いた敲石の欠損品。上下端に敲打痕を有するが全体的に剥離・風化が著しい。	二の郭	表採
" " 2	"	16.6 8.5 3.4	620	自然円礫を用いた敲石の欠損品。ところどころに敲打痕を有するが全体的に剥離・風化が著しく敲きは判然としない。	二の郭	表採
" " 3	砥石?	5.1 4.7 1.9	79	上下端を欠損する。破損部以外の周囲を丁寧な研磨しており、滑面となる。	T.P.3	Ⅱ層
" " 4	"	4 3.4 1.3	27	上下端及び裏面を欠損する破損品。側面部は丁寧な研磨で滑面となり、右下半部には研痕と思われる傷が残る。	T.P.3	Ⅱ層
" " 5	磨石	11.7 7.2 7.4	590	大部分を損失するが、欠損部以外の面では細かい磨面が認められる。	T.P.2	Ⅲ層

6 鉄製品

調査区全体を通してT.P.2より唯一鉄製品が出土している。第20図－6に図示した。長さ8.4cm、重さ14.03gを計る。全体に錆ぶくれがひどく形状は判然としない棒状の鉄製品である。不明瞭ではあるが断面が方形に近く、下端にいくにしたがって若干細くなることから頭部を欠損した鉄釘と目される。



第20図 シイナグスク出土石器・鉄製品

第V章

シイナグスク出土の植物遺体

1 遺跡の調査の概要

a：遺跡の所在	沖縄県今帰仁村
b：遺跡の名称	シイナグスク
c：調査の機関	今帰仁村教育委員会
d：調査担当者	宮城 弘樹
e：発掘期間	平成14年度
f：遺構の年代	グスク時代（13世紀後半）

2 バック・グラウンド

今帰仁村では、世界遺産に指定された今帰仁城を含め、10ヶ所のグスクが確認されている（宮城 弘樹 2002 私信による）。シイナグスクは、そのうちの一つで、13世紀後半に利用されたグスクである。平成14年度の試掘調査の結果、機能の不明な炉跡が1基検出された（写真1）。遺構はほぼ円形で、直径約90cm、深さ約40cmであり、最下層では炭が顕著に観察された。炉の機能を理解するために、炉跡直上、炉跡内（上層）、炉跡内（下層）、および炉跡内（最下層）から、計266リットルの土壌をサンプリングした。加えて、テスト・ピット9のⅠ～Ⅲ層から計12リットルの土壌をサンプリングした（表8）。土壌サンプルのフローテーション処理（写真2）の後、計1082.2グラムの浮遊物が回収された。回収された浮遊物を分析した結果、栽培植物ではイネ、アワ、キビ、コムギ、およびオオムギ、野生植物では、タデ科などの種子が検出された。

写真1：シイナグスクより検出された炉跡



写真2：土壌サンプルのフローテーション処理



表8 シイナグスク出土の植物遺体

層 序	レ ベル (cm)	サ ン プ ル No.	L F No.	土 壌 量 (ℓ)	浮 遊 物 量 (g)	イ ネ (穎果/粒/片)	イ ネ ? (片)	ア ワ (粒/片)	ア ワ ? (片)	コ ム ギ (粒/片)	オ オ ム ギ (粒/片)	ム ギ 類 (片)	キ ビ (粒)	タ デ 科 (粒)	マ メ 科 (粒/片)	マ メ 科 ? (粒)	オ ヒ シ バ (粒)	コ ミ カ ン ソ ウ (粒)	カ ヤ ツ リ グ サ 科 (粒)	不 明 (粒)	同 定 不 可 能 (片)	合 計	植物遺体分布密度 (遺体数/ℓ)
I層		TP9 (No.1)	19	1	7.03																		
			小計	1	7.03																		
II層	0～5	TP9 (No.2)	20	1	2.46																1	1	
II層	5～10	TP9 (No.3)	21	1	0.95															1		1	
II層	10～15	TP9 (No.4)	22	1	0.77																		
II層	15～20	TP9 (No.5)	23	1	0.69																		
II層	20～25	TP9 (No.6)	24	1	1.56																		
II層	25～30	TP9 (No.7)	25	1	0.62						1											1	
II層	30～35	TP9 (No.8)	26	1	0.4																		
II層	35～40	TP9 (No.9)	27	1	0.16																		
II層	40～45	TP9 (No.10)	28	1	0.2																		
			小計	9	7.81						1									1	1	3	0.33
III層	0～5	TP9 (No.11)	29	1	1.53																		
III層	5～10	TP9 (No.12)	30	1	0.74	1																1	
III層	10～15	TP9 (No.13)	31	1	0.2					2												2	
			小計	3	2.47	1				2												3	1
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.1)	9	9.5	27.72					1												1	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.2)	1	5.5	12.22										1						3	4	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.3)	10	8	24.94																		
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.4)	11	10	10.74	6														1	3	10	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.5)	2	2	1.87																1	1	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.6)	18	10	12.91	2	2					1										5	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.7)	17	12	26.56	2	1													1	2	6	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.8)	5	10.5	14.39	1	7						1									9	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.9)	12	10	14.27			1		1											1	3	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.10)	8	7.5	17.16	1		1									1					3	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.11)	3	8	16.11																2	2	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.12)	13	8.5	14.49	1															4	5	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.13)	14	7.5	12.43					1								1			1	3	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.14)	4	6.5	11.31	7		1														8	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.15)	16	8.5	26.67	1															3	4	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.16)	15	7.5	17.93						1							1		1		3	
黒色土	炬跡直上	TP10 (No.17)	6	4	4.19	1								1	1						1	3	
			小計	136	265.91	22	1	12		3	1		2	1	1		1	2		3	21	70	0.52
上層	炬跡内	TP10 (No.18)	32	7.5	6.73			1	3					1				1		1	3	10	
上層	炬跡内	TP10 (No.19)	7	7.5	5.71	1		1													1	3	
上層	炬跡内	TP10 (No.20)	33	9	6.35			3												1	2	6	
上層	炬跡内	TP10 (No.21)	34	7	2.71	1		1													1	3	
上層	炬跡内	TP10 (No.22)	35	8	5.62			2													4	6	
上層	炬跡内	TP10 (No.23)	36	7	7.04			1	1							1					4	7	
			小計	46	34.16	2		9	4					1		1		1		2	15	35	0.76
中層	炬跡内	TP10 (No.24)	37	10	11.13							1								3	4	8	
中層	炬跡内	TP10 (No.25)	41	11	12.12																6	6	
中層	炬跡内	TP10 (No.26)	42	10.5	11.63	1														1	3	5	
中層	炬跡内	TP10 (No.27)	39	12	7.59			2			1										4	7	
中層	炬跡内	TP10 (No.28)	40	10	6.88											1					1	2	
中層	炬跡内	TP10 (No.29)	38	7	12.52			1						1				1			5	8	
			小計	60.5	61.87	1		3			1	1		1		1		1		4	23	36	0.6
下層	炬跡内	TP10 (No.30)	43	7	140.8																10	10	
下層	炬跡内	TP10 (No.31)	45	7				1	1												5	7	
			小計	14	140.8			1	1												15	17	1.21
最下層	炬跡内	TP10 (No.32)	44	10	569.17		2													1	33	36	
			小計	10	569.17		2													1	33	36	3.6
			合計	278	1082.2	26	3	25	5	5	3	1	2	3	1	2	1	3	1	11	108	200	

3 検出された炭化種子

I) 栽培植物

イネ *Oryza sativa* L.

イネ穎果が26 (粒/片) 検出された。また、イネ穎果と思われる植物遺体も3 (片) 回収されている。そのうち計測可能なイネ穎果は、7粒で、その平均値は、長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm): 3.4×2.3×1.3 (表9)。写真1aおよびbのサイズは、それぞれ3.6×2.1×1.5mm (T.P.10 No.26) および 3.0×1.8×0.9mm (T.P.10 No.4)。

表9 シイナグスク出土のイネサイズ

サンプルNo.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
TP10 4	3	1.8	0.9
TP10 8	4	2.3	1.3
TP10 14	3.3	1.9	1.1
TP10 14	3	2.6	1.1
TP10 14	3.1	2.8	1.2
TP10 21	4.1	2.7	1.7
TP10 26	3.6	2.1	1.5
平均	3.44	2.31	1.26

アワ *Setaria italica* (L.) Beauv.

アワ穎果が25粒、アワの穎果と思われるが、保存の状態が悪い植物遺体が5粒が検出された。

12粒が検出可能で、その平均値は長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm): 1.1×1.1×1.1 (表10)。

写真2aおよびb (両アワともT.P.10 No.20より) のサイズは、それぞれ1.2×1.2×0.8mm および1.3×1.1×1.1mm。

表10 シイナグスク出土のアワサイズ

サンプルNo.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
TP10 6	1.3	1.2	0.9
TP10 8	1.1	1	0.9
TP10 8	1.1	1	1.1
TP10 8	1.1	1	0.9
TP10 14	0.9	0.9	0.5
TP10 18	1.1	1	0.7
TP10 19	1.2	1.1	0.8
TP10 20	1.2	1.2	1.1
TP10 20	1.3	1.1	0.8
TP10 22	1.2	1.1	0.8
TP10 23	1.1	0.9	0.8
TP10 27	0.9	0.9	0.8
平均	1.1	1.1	1.1

コムギ *Triticum aestivum* L.

コムギの穎果が、計5粒検出されている。そのうち計測可能な穎果は、1粒で、そのサイズは、長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm): 2.6×1.9×1.9 (写真3 T.P.10 No.13)。小型コムギに属するものと思われる。他のコムギ破片も小型コムギに属するものと思われる。

オオムギ *Hordeum vulgare* L.

オオムギの穎果が、3片回収されている。3片とも、完形ではない。写真4は、そのうちの保存状態の良い穎果で、長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm): 4.4×2.4×1.8 (T.P.9 No.7)。

キビ *Panicum miliaceum* L.

キビの穎果が2粒検出された。両穎果ともに計測不可能。写真5のサイズは、長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm): 1.7×1.3×1.1 (T.P.10 No.6)。

II) 野生植物

タデ科 POLYGONACEAE

タデ科の瘦果が、3粒検出されている。写真6 (T.P.10 No.17) のサイズは、長さ(mm)

×幅(mm):1.2×0.6。

マメ科 LEGUMINOSAE

マメ科の種子が、1点検出された(写真7 T.P.10 No.2)。また、マメ科と思われるが、マメ科と判断するには十分の特徴を欠く遺体が2点検出されている(写真8 T.P.10 No.28)。それぞれの長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm)は、2.8×1.8×1.4 および3.8×1.9×1.7。

オヒシバ *Eleusine indica* (L.) Gaertn.

瘦果が、1片検出された。写真9(T.P.10 No.10)の残存部のサイズは、長さ(mm)×幅(mm):0.9×0.6。

コミカンソウ *Phyllanthus urinaria* L.

コミカンソウの瘦果が3粒検出された。写真10(T.P.10 No.18)のサイズは、長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm):1.1×1.8×0.6。

カヤツリグサ科 CYPERACEAE

カヤツリグサ科の瘦果が1点検出されている(写真11 T.P.10 No.29)。長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm):1.5×1.1×0.5。

不明種子

11点検出されている。

- 不明A (写真12 T.P.9 No.3)種子は、圧扁卵形。上部を欠いている。側面は半楕円形、サイズは、7.3×8.8 (長さ×幅) mm。1粒回収された。
- 不明B (写真13 T.P.10 No.7)種子は超楕円形。側面は、半楕円形。長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm):1.6×0.8×0.8。T.P.10 No.24からも回収されている。計2粒である。
- 不明C (写真14 T.P.10 No.16)種子は球体。写真14は、反対側を欠いている。表面には数条の縦溝が観察される。長さ(mm)×幅(mm):2.8×3.0。1粒回収されている。
- 不明D (写真15 T.P.10 No.18)種子はほぼ長楕円形。イネ科瘦果に類似する。長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm):1.4×1.5×0.5。1粒回収されている。
- 不明E (写真16 T.P.10 No.16) 種子はほぼ球体。表面には網目状のパターンが観察される。
- T.P.10 LF26から1粒回収されており、計2粒である。写真16の長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm):0.8×0.6×0.5。
- 不明F (写真17 T.P.10 No.24)種子はほぼ三角形。側面は広線形。T.P.10 No.4から1粒、T.P.10No.24から2粒の計3粒が検出されている。長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm):1.4×1.3×0.9。
- 不明G (写真18 T.P.10 No.31)種子は広楕円形。バラ科の核に類似する。長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm):2.8×2.5×1.8。

保存同定不可能

状態が悪く、同定の不可能な植物遺体が、計108片確認された。

4 まとめ

宮城弘樹（2002、私信）によると、シイナグスク出土の炉跡に類似する遺跡は、銘苅原遺跡より1基（那覇市教育委員会 1997）および真志喜森川原遺跡より2基報告されている（宜野湾市教育委員会 1994）。杉井(2003)は、これらの遺構を屋外炉と解釈しており、呉屋（宜野湾市教育委員会 1994）は、森川原遺跡のうち一方を土坑炉、もう一方を灰坑炉と考えている。調理を想定した解釈のようである。宮城弘樹は調理に関わる機能に加えて、遺構のサイズなどを考慮し、その他の機能—例えば炭焼き窯—の可能性も想定している(2002、私信による)。今回、このような炉跡遺構の機能を理解するために、炉跡内の土を回収し、植物遺体の検出を試みた。その結果、計194（粒／片）の植物遺体が検出された。数は少ないが、同定された植物遺体の大半が栽培植物の遺体であることから、「炭焼き」としてより、ある程度は「食」に関連した遺構であったのではないであろうか。「屋外炉」は、シイナグスクを含めて、4基のみ報告されているが、現時点では、確認されているのはグスク時代の「屋外炉」はこれらのみである。この事実は、「屋外炉」は特別な遺構ではなく、一般的な炉であったことも示唆するものと思われる。

次に、植物遺体の分布密度について簡単に述べたい。植物遺体の炉内各層における分布密度は、下層および最下層が最も高かったが、これらの2層は、同定不可能遺体が大半を占め、過去の植物利用を知る手がかりとなり得る情報はほとんどなかった。その意味では、炉跡真上、炉跡内（上層）および炉跡内（中層）の3層に今回回収された植物遺体が集中していたようである。同定不可能を含むこれら3層の植物遺体密度は、それぞれ1リットルの土壌サンプル中、0.52遺体、0.76遺体、および0.6遺体であった。これらの密度の統計学的な意義は不明であるが、数字のみをみると、炉跡内では、下層および最下層より上部の方に植物遺体が分布しているようである。サンプリングの方法として、炉跡内のみならず、炉の周辺の土壌をサンプリングしていたら、もう少し植物遺体の回収率は高かったのではないであろうか。

また、テスト・ピット9は、包含層からのサンプリングではあったが、サンプル量が少なかった割には、炭化種子を回収することが出来た。密度でいうと、第Ⅲ層が土壌サンプル1リットルあたり1遺体と最も高く、第Ⅱ層は、1リットル中0.33であった（第Ⅰ層には、炭化種子は含まれていない）。単純に、この密度から推測できることは、グスク時代には、一般的に栽培植物が食されていたであろうことである。

さて、今回の分析結果は、1つの興味深い仮説を提供するようである。すなわち、グスク時代の農耕に地域性が存在したのではないであろうか。一昨年前まで、主に中南部に所在するグスク遺跡出土の植物遺体を分析してきたが、これらの地域のグスク遺跡では、イネはマイナーで雑穀が多かった。アワやコムギが、農耕の中心であったようである。このことからグスク時代の農耕は「雑穀中心」と考えていた。しかし、一昨年、今帰仁城出土の炭化種子を実見し、出土量の多さ以上に、イネが多かったことにショックを受けた。さらに、赤木名グスク（奄美大島笠利町）出土の炭化種子を分析した結果、ここからもイネが多く検出された（高宮 2003）。このような情報をもとに、沖縄県中南部の雑穀農耕と、奄美沖縄県北部の稲作農耕を想定し、植物遺体を分析している。

その結果、例えば、グスク時代初期と考えられるウガンヒラー北方遺跡（読谷村）からは、

アワやコムギが多く出土し、イネは少なかった（高宮 印刷中）。このことは、中南部雑穀農耕をサポートするようである。今回シイナグスクでは、イネが最も多く検出されたわけではないが、中南部と比較すると、イネが顕著であった。ウガンヒラー北方遺跡およびシイナグスクより検出された植物遺体分析結果は、上記した想定をある程度支持するものではないであろうか。中南部の雑穀中心の農耕と北部奄美地方のイネ（＋アワ）の農耕という二つの農耕システムが存在していたとすると、今後のグスク時代研究に新たなアプローチを提示するものと考えられる。シイナグスクより検出された栽培植物は、他のグスク遺跡と比較すると数が少ないので、上述した仮説を強く支持するものではないが、少なくとも否定するものではない。炉跡の研究に加えて、この仮説を検証するためには、今後のデータの追加および検証が必要である。

謝辞：沖縄本島北部に所在するグスク遺跡の植物遺体の分析という、大変興味深い機会を与えてくださった今帰仁村教育委員会宮城弘樹氏に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 宜野湾市教育委員会（1994年）『真志喜森川原遺跡』宜野湾市教育会：宜野湾市
- 杉井 健（2003年）「沖縄諸島における居住形態の変遷とその特質」『先史琉球の生業と交易』木下尚子（編）pp87－113. 熊本大学文学部：熊本
- 高宮 広土（2003年）「赤木名グスク出土の植物遺体（速報）」『赤木名グスク遺跡』笠利町教育委員会（編）pp66－69.笠利町教育委員会：笠利町
- 高宮 広土（印刷中）「ウガンヒラー北方遺跡出土の植物遺体」『ウガンヒラー北方遺跡』読谷村教育委員会（編）：読谷村
- 那覇市教育委員会（1997年）『銘苅原遺跡』那覇市教育委員会：那覇市



1) a イネ



b イネ



2) a アワ



b アワ



3) コムギ (背面)



コムギ (側面)



コムギ (腹面)



4) オオムギ (背面)



オオムギ (側面)



オオムギ (腹面)



5) キビ



6) タデ科



7) マメ科 (表面)



マメ科 (内面)



8) マメ科?



9) オヒシバ



10) コミカンソウ



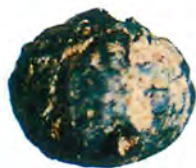
11) カヤツリグサ科



12) 不明 A



13) 不明 B



14) 不明 C



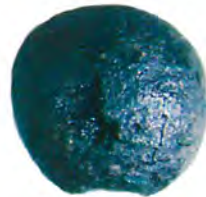
15) 不明 D



16) 不明 E



17) 不明 F



18) 不明 G

写真3：シイナグスク出土植物遺体

第Ⅵ章

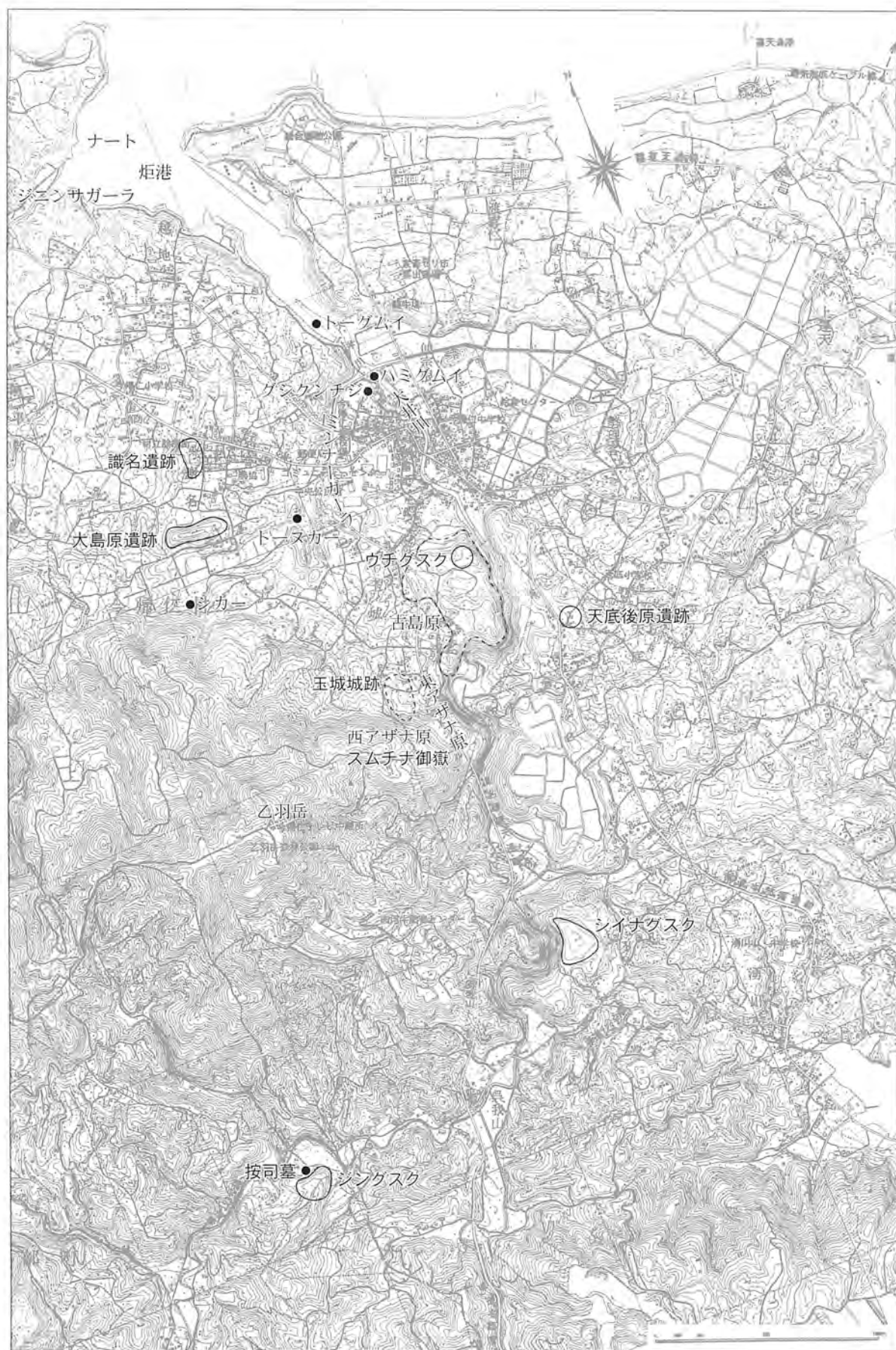
大井川沿いの遺跡について

前章までにシイナグスクの試掘調査の成果を中心に報告してきた。本遺跡を考える上で歴史概観で若干触れた周辺地域の遺跡について、現在確認されている表採資料を紹介し、シイナグスクを考える一助としたい。

大井川は本部町伊豆味嘉津宇岳に水源を発し、本部半島北海岸のほぼ中央を南から北へ伊豆味・呉我山・玉城・仲宗根を流れて東シナ海に注ぐ。大井川の河口ではジニンサガーラ、ミンナーガーラの河口とともに大きな湾をつくり出している。この湾はターミナト（炬港）と呼ばれており、『琉球国由来記』や『球陽』には「仲宗根湊と呼んでいたが、孟氏大里親方宗森が進貢使として中国に赴き、その帰路台風に遭遇し闇夜に迷っていると炬火が見え、着いてみるとこの湊であったところから炬港と呼ぶようになった」と記されている。大正末年頃まではこの炬港には物資を運ぶ山原船が字玉城の寒水原（パーマ）まで入港したとされる。大正7年以降は山原船からの荷揚げをピサチヌ前で行われていたとされ、陸揚げされた物資が仲宗根の街に卸された。このため現在でも地名にその名残を見ることができる。例えばナハブイの深みは山原船の停泊地として利用されたとされる。同様にミンナーガーラから流れてくる注ぎロー帯はトーグムイと呼ばれ、やはり暴風時の山原船避難場所として利用されたとされている（新城1996・山内1993）。渡喜仁に行くところのハキジヌメー（掛地の前）の地名は、船を掛けた土地の語意に由来があるとされる（糸数1975）。河川の沖積地一帯に繁華街を形成する仲宗根の地名の由来も東シナ海の中の洲根（すに）であったことに由来すると伝承されている。

大井川の河口を見下ろすことのできる小丘、字仲宗根の中央に位置する仲宗根原にはグシクンチジの名称で呼ばれるグスクがある。今のところ当該地点から遺物の採集は報告されておらず、明確な遺構は確認されていないため城塞的な、あるいは居住地として恒常的な生活のあった遺跡として考えるのは困難である。しかしお宮、アサギ、獅子がなし等があり、南側にはウイヌカーの拝所も隣接するなど集落の聖地として字仲宗根のランドマークとなり、公民館もここに置かれ中心地となる。仲松弥秀によって次のように詳述されている。「グスクノチジという。その南斜面に旧家群、神女はウペーブ屋、ヤマカンヤー、アカジカヤーから出自」（仲松フィールドノート）。

仲宗根より上流域にある字玉城にはウチグスクが立地している。玉城は明治36年岸本、寒水の2字を玉城に併合してできた字である。小字名古島原が合併前の玉城の故地とされ当該地域は広い範囲で遺物が採集されている。第22図はウチグスク・古島原で表面採集された主な遺物で、1～4は青磁で、1は口縁に雷文帯が描かれる碗。2は体部に蓮弁文を描く碗の底部資料。3は泉州窯系の碗底部、4は無文皿の口縁部である。いずれの資料も14世紀から16世紀頃の年代で整理することのできる資料である。5は白磁碗底部資料で見込みには印花文を施している。6は粗製の染付碗で口縁外面に文様が描かれているが小破片のため不明である。白磁が14世紀後半から15世紀前半代の資料で、染付磁器は16世紀前後の遺物と推測される。7はグスク土器の底部資料である。8・9はカムィヤキ須恵器で前者は底部資料、後者は胴部で波状文を施す。10・11は石器で、10は敲打痕を残す叩石の破片資料で、11は全体を敲打によって球形に整える石弾である。12は煙管の雁首で瓦質焼成の焼きものを素材として加工してつくられている。年代的にはカムィヤキ須恵器やグスク土器が出土することから14世紀前半代までは古く見ることが可能で、煙管雁首などから17世紀頃までは継続的に当該地域に営みがあったと推定される。現在、この古島原一帯では今帰仁村の中心街である仲宗

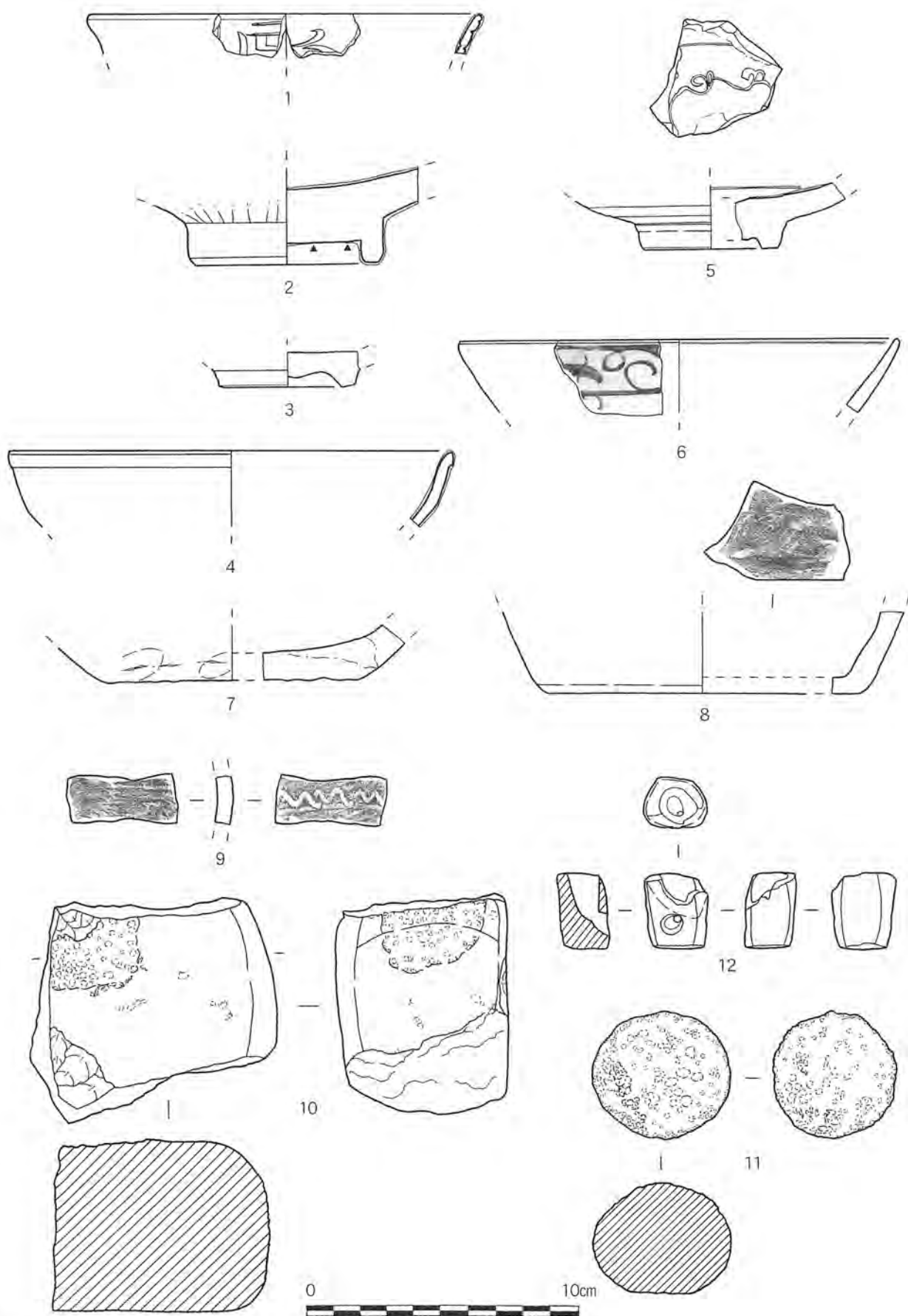


第21図 大井川沿いの文化財分布図

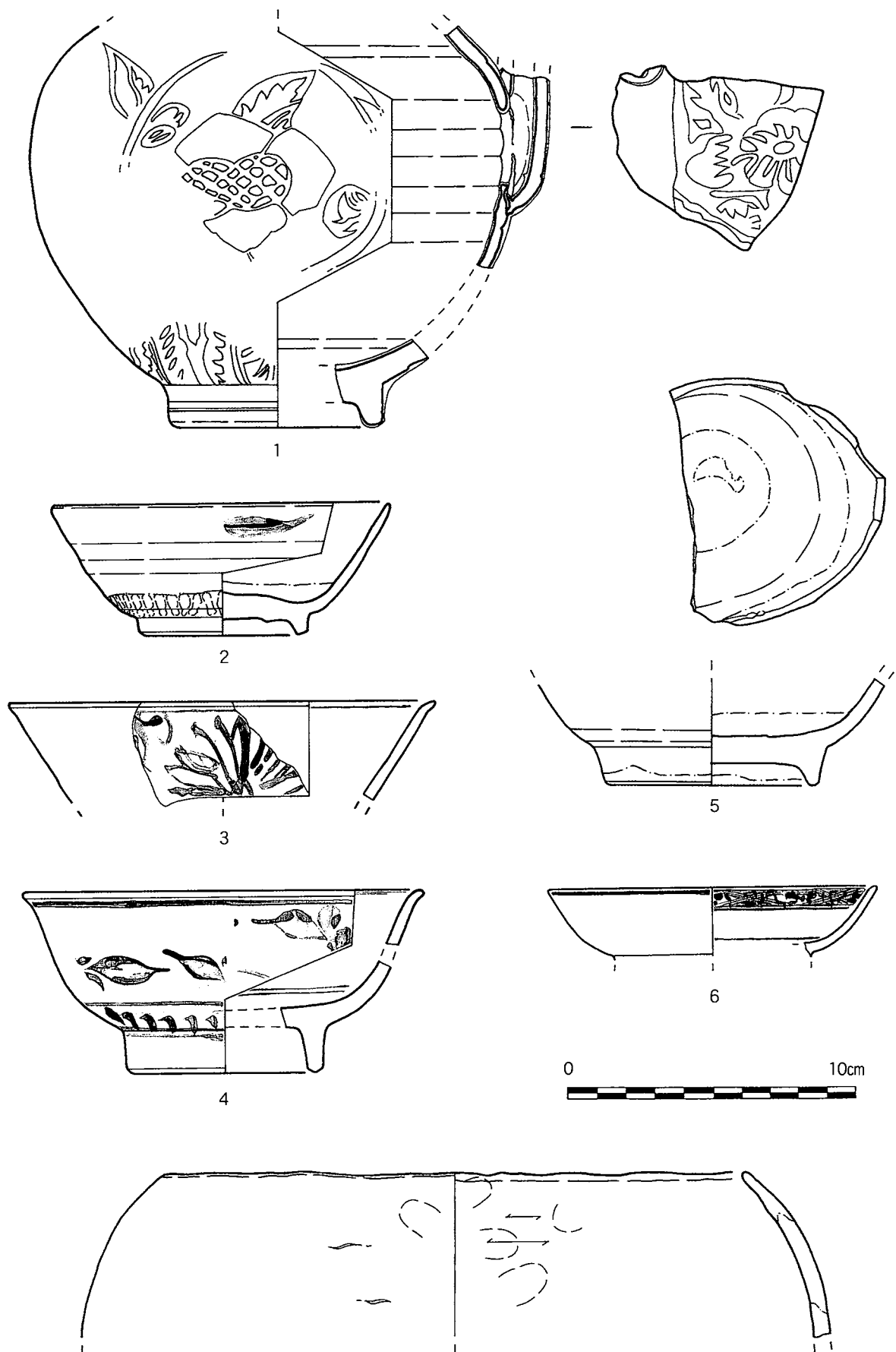
根から近く、名護市への交通アクセスも便利であることから、村内でも住宅地の開発が特に進んでいる地域の一つである。今後はこれらの遺跡の保存に注意を必要とする。実際に、医療法人葦の会の研修施設が建築確認等無届けで施工され、ウチグスクが開発によって甚大な被害を受けている。計画に際しては当該地域の文化財の保存に十分に配慮することを関係各課と調整する必要がある。

玉城の西側に隣接する字謝名には謝名大島原遺跡（旧称：ウンジョウヘイ遺跡）がある。これもグスク時代の遺跡として知られる。遺跡名について『謝名誌』において、遺物が包含される範囲がウンジョウヘイに限られず広い範囲に認められること、御嶽を背景にして南斜面に広がっていることから謝名の村立とつながる遺跡という歴史的な観点から謝名大島原遺跡とした方が妥当と指摘（仲原1987）されるため、本報告では謝名大島原遺跡として報告する。当該地域周辺では土地改良が進み旧地形を窺い知ることは困難である。しかし、かつては美田地帯として知られている。特にシカーと呼ばれる湧水地点からトヌカーを流れ仲宗根に至り大井川河口のミンナーガーラへと至ることから大井川に注ぐ支流の一つの起点ともなっている。また、謝名大島原遺跡の立地する丘陵頂部は御嶽となり聖域であるとともに、丘陵北側にはグシクンシリーと呼称される地名が残っていることから、丘陵そのものをグスクと考えても大過ないと思われる。しかしこの丘陵頂部には現在のところ明確な防御的な遺構は未見である。謝名大島原遺跡からはこれまで多くの資料が採集されている。第23～25図に表面採集された主な陶磁器を図示した。1は青磁の水注でやや文様の加飾は粗造であるがグスクなどで出土するような良品である。2～6は中国製染付磁器で2～5はいずれも粗製の碗で清代の染付磁器と考えられる。6は染付皿の口縁部資料で16世紀頃の資料であると考ええる。7は土器でグスク土器の鍋（浅鉢）形の口縁部である。口唇部を舌状につくる粗造で薄手の資料である。第24図－8はタイ産の褐釉陶器の底部資料である。9・10は肥前陶器で銅緑釉を施す嬉野山野内窯産と目される碗形の資料である。11は織部焼（もしくは唐津）の大皿で見込みに同心円文を加飾し、体部には波状文と縦方向の線文を描く、口縁部には口縁と並行に回線が廻り三日月状の文様が施される。重ね焼きの目跡が見込みと高台に認められる。12・13は肥前磁器の瓶で、14は肥前磁器の碗である。第25図15～19は沖縄産陶器で、いわゆる喜名焼の特徴として指摘される素地に白土が交胎となる特徴が認められる。15は壺の口縁部、16は壺の底部資料と目されあるいは同一個体と考える。18は水鉢の口縁部資料で口縁部の作りは断面形三角となり体部が張る器形であることから沖縄産陶器でも古手の要素をもつとされる（島弘氏2003年私信）。19は水鉢の底部である。17は皿形の器形の口縁部資料である。年代的にはグスク土器や青磁が採集されることから13～14世紀代に遡ると考えられグスク時代には遺跡として形成されていたと推定される。表採資料であるが沖縄産陶器や近世磁器に時代的まとまりがある点は興味深い。なお、この他にも縄文時代の土器や近代の陶磁器も多く表採されているが本報告では、シイナグスクとの関係から省略した。

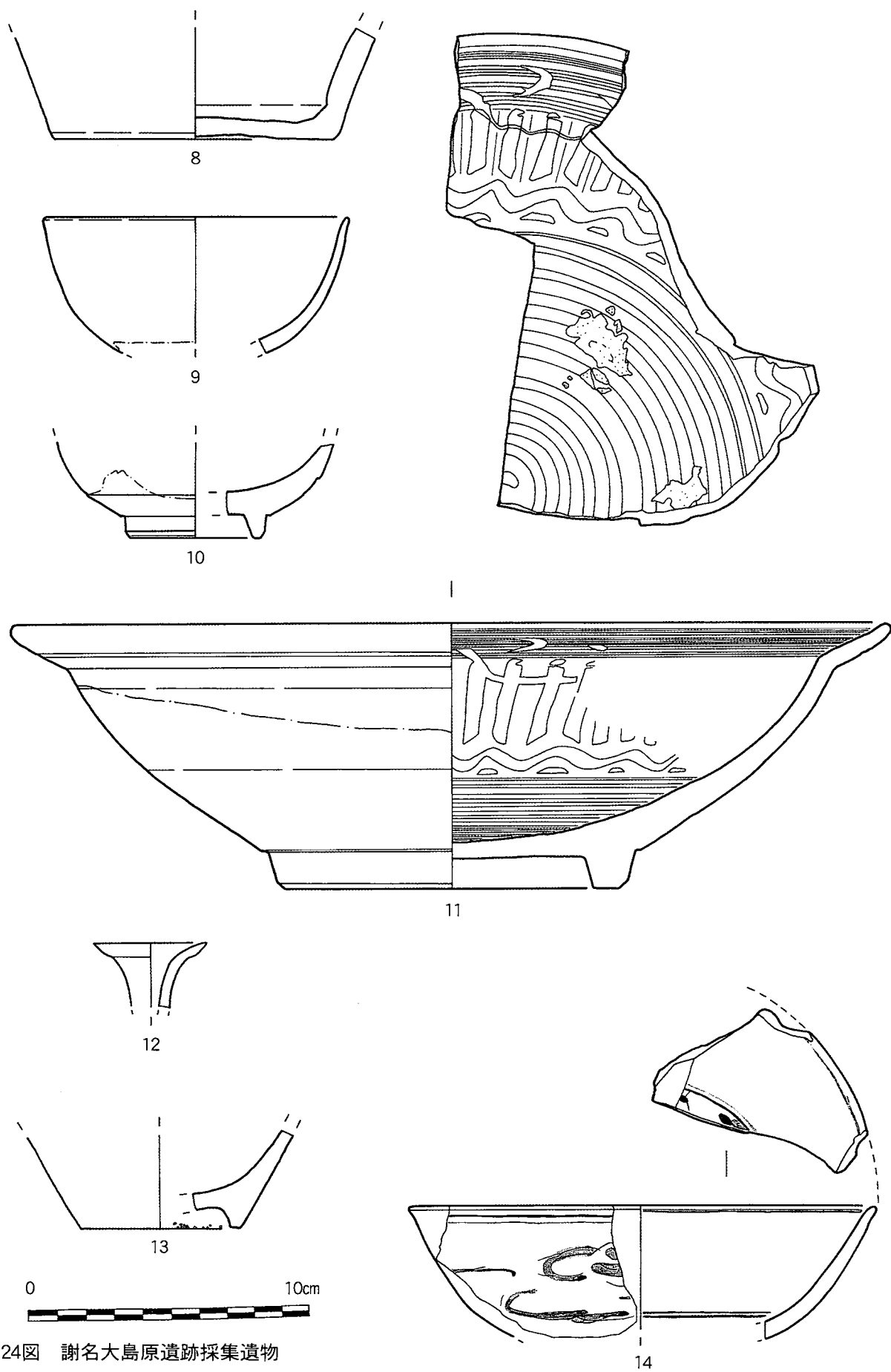
これまで大井川左岸（西側）を紹介したが、反対の東側には天底後原遺跡がある。天底後原遺跡は試掘調査を実施しており詳細については別報告に譲るが、採集された主な遺物について少しだけ触れることとする。古宇利架橋建設に伴い、古宇利島から名護市の屋我地島へ橋が架かる計画に伴い、更に屋我地島から今帰仁村本島側の天底に架かるワルミ架橋の建設が予定されている。このワルミ架橋から延長予定の屋我地仲宗根線建設に伴い、平成13年度に遺跡の分布調査を、平成14年度には範囲確認調査を実施した。土木事務所と調整の結果平



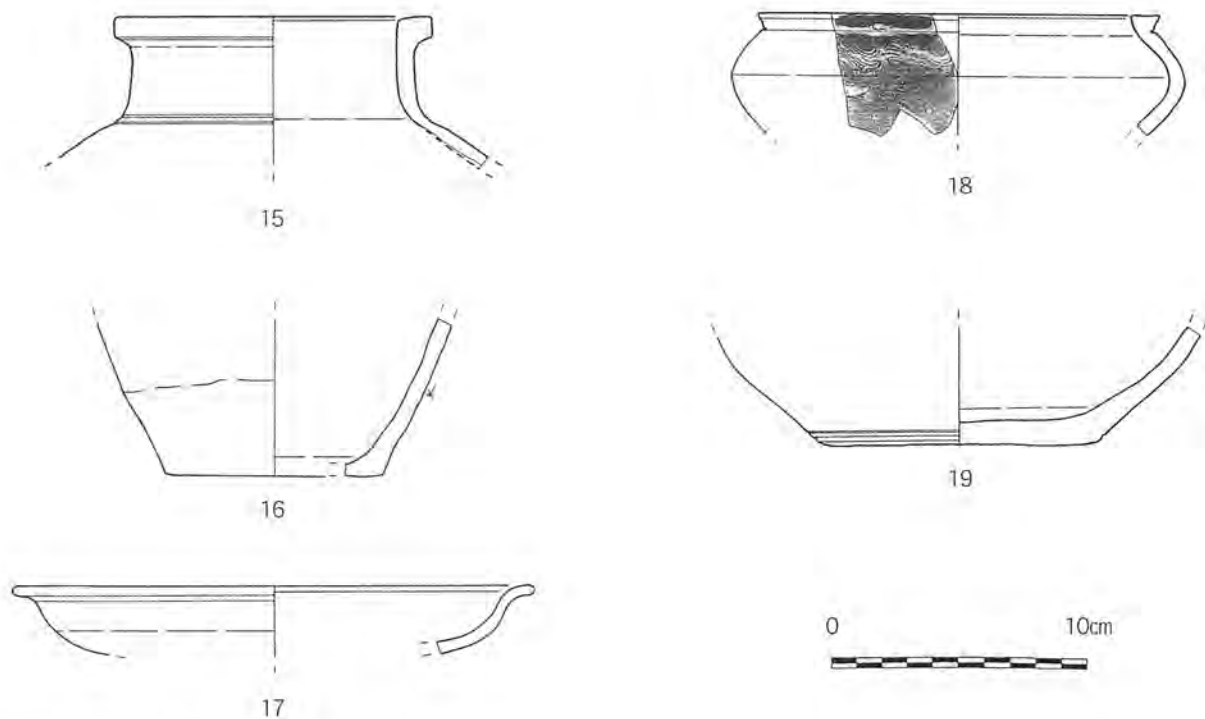
第22図 ウチグスク採集遺物



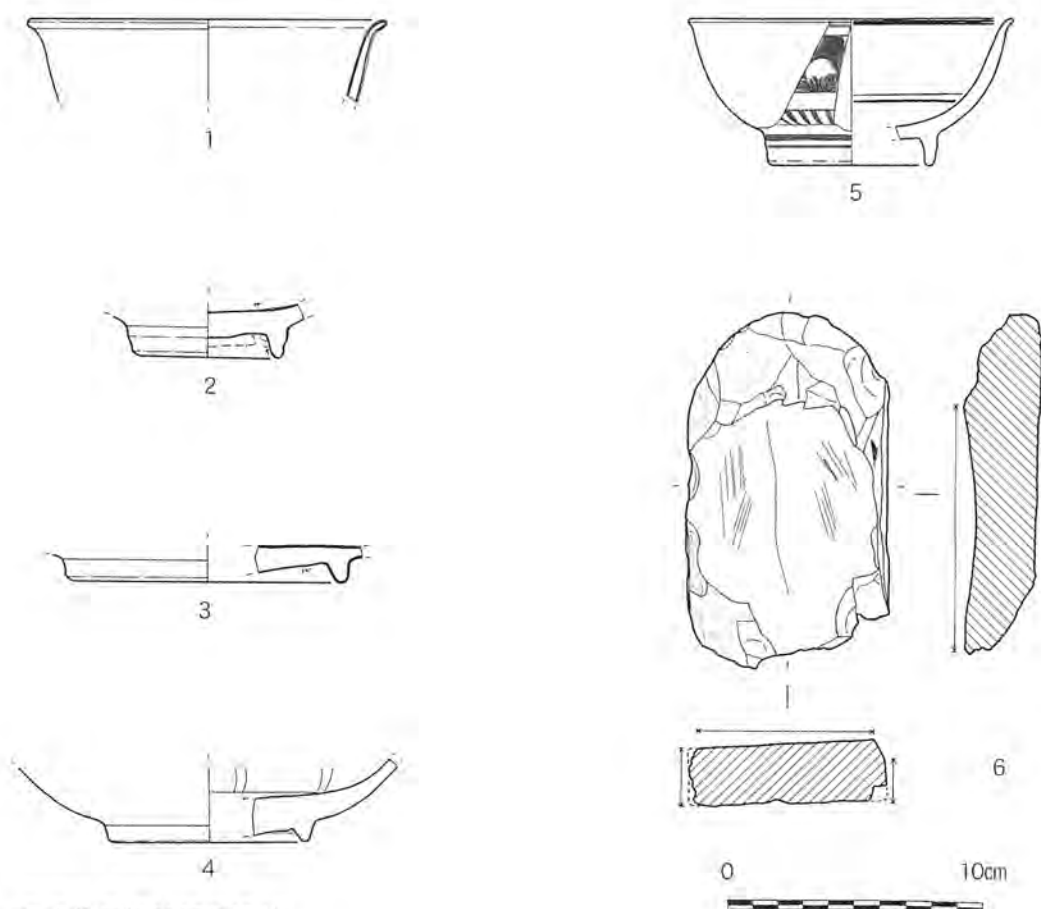
第23図 謝名大島原遺跡採集遺物



第24図 謝名大島原遺跡採集遺物



第25図 謝名大島原遺跡採集遺物



第26図 天底後原遺跡採集遺物

成16年度に記録保存調査を予定している。遺跡は大井川の東方台地上に立地しており、グスク時代の遺物を包含することが確認された。主な遺物として第26図に図示した資料が得られており、概ねグスク時代から近世に遺跡が形成されたと推定される。第26図－1は青磁で口縁部を外反させる無文碗。2は青磁碗の底部資料で見込みは釉剥ぎされ露胎となる。3・4は盤の底部資料と考えられる。後者は内体部に篋彫りで文様が描かれる。5は清朝染付磁器で外体面腰部に蓮弁を配し、主文様に梅などの花文が描かれる。6は砥石で4面に作業面を有する。他にも沖縄産陶器、近代の磁器などが得られるがこれについては本調査によって明らかにされる予定であるので詳細は割愛した。

以上、これまで遺物の採集事例から大井川沿いの遺跡について紹介してきた。シイナグスクの下流域には実に多くの遺跡が展開していることが分かる。この他にも上流には本部町伊豆味にジングスクというグスクがある。村外であることから詳細な調査は当教育委員会では実施していないため不明な点も多いが、シイナグスクとの関連性を考えると興味深い遺跡である。主要な文献では下記のように記されている。

北山城主に仕えた「マーミ按司」が、北山城が戦いに負けたので、密かに家族を引きつれて、今帰仁城からここへ逃げ込んだと言われる（新城1982）。

尚巴志軍と北山の残兵による決戦場説（兼次1965）。

そこに城を築いたために陣地とよばれたとする説（兼次1965）。

いずれも北山城との関わりで記憶されており、伝説上からはシイナグスクとの関わりは少ないようである。しかし一方ではシイナグスクに関わる伝説に「昔シイナ城には絶世の美女がいたそうであるが、西側の山の頂上に若い武士があらわれ、（中略）いつしか二人は相愛の仲となった（中略）。ところが伊豆味のアブ岳に住み、馬に乗って出沒する得体の知れない武士があらわれてからは、その美女と西側の若い武士の姿は見えなくなった（新城1982）」と伝えられており、伊豆味の武士についてはジングスクの按司ではないだろうかと新城徳祐氏は補足している。また、このジングスク下方河川沿いには按司墓がある。

その一方で河川沿いの台地上にはシイナグスクと同様な山塊状の丘が多く分布する。乙羽岳麓にあるスムチナ御嶽は字玉城に位置し旧暦4月15日には仲宗根・玉城・謝名・平敷・越地（謝名より分字、1981年よりの参加（島袋1996））が拝所とする聖域として利用されている。御嶽中腹には用途不明の石積み遺構が確認されており、当該地域を玉城城跡として報告する文献（宮城・高宮1983）もあり、他にも未確認だがガチマルグスク、クンジャドグスクなどの未見のグスクもあることから詳細な調査が望まれる。他にも玉城の小字にアザナ原の地名がある。アザナは首里城の石垣に構築された出角状の高台に付された呼称で、西のアザナ等の施設が知られている。

グスク時代に生活の痕跡を残す遺跡がある一方、山頂部に特に遺構が見られず遺物の散布も現状では確認されないという丘も多く、これらの遺跡にならなかった、大井川沿いの丘陵について、グスク時代に選択された土地と選択されていない土地という観点から整理することも重要であると考ええる。

第Ⅶ章

おわりに

前章までにシイナグスクの試掘調査の成果を報告してきたが、最後に若干のまとめをして結びとしたい。

まず最初に、シイナグスクの使用年代について考えてみたい。検出された陶磁器をみるといずれの調査地区でも土器を中心にカムイヤキ・青磁鎗蓮弁文碗、白磁口禿碗・同皿・白磁今帰仁タイプ碗が出土している。これに近似する遺跡として今帰仁城跡第Ⅸ層が知られている。今帰仁城跡のⅨ層ではいわゆる砧手の青磁碗を含む点が異なるが、全体的な様相としては極めて酷似する。近年整理された大宰府分類（太宰府市教育委員会2000）では龍泉窯青磁碗青磁Ⅰ-Ⅴ類をⅡ類と整理した上で、本遺跡は大宰府分類の青磁Ⅰ・Ⅱ類、白磁碗Ⅸ、同皿Ⅸなどが出土する。これらの状況から年代を推定すると、大宰府の編年観では青磁から13世紀初頭～前半を、白磁では13世紀中頃から14世紀初頭に整理される（太宰府市教育委員会2000）。沖縄の輸入陶磁を整理する金武正紀氏の編年（金武1998）を借用すると青磁・白磁とも13世紀後半を中心とした年代が与えられている。今回シイナグスクの遺物包含層からは、土器・陶磁器・カムイヤキ以外のものを含む層は耕作土に限られ近代以降のものであることから時代的にも隔絶している。このことから、今回限られた調査範囲ではあるが10箇所の調査地点中遺物が確認された7地点でいずれも年代が13世紀頃限定される遺物を包蔵する遺跡として評価することができると考える。14世紀以降の遺物を含まないことから、遺跡全体が短期間の使用であったことが想定される。

遺構は一の郭、二の郭で実施したT.P. 7・8における試掘調査にてピットが検出された。調査面積が狭いため遺構のプランを確認するには至っていないが、恐らくは建物跡の柱穴と考えられる。このことから平場が居住区であったと想定した。T.P. 2・9では傾斜部に包含層が厚く堆積する。この傾斜する堆積層も整地作業的な堆積状況や造成時の地業として想定し調査を行ったが、断定するには難しいと考える。一の郭を囲む石積みの構築年代は現在のところ判断する資料に乏しい。このため近現代に行われた畑との関係で整理されるべき遺構なのか、あるいはシイナグスクの築城時の遺構なのかは判然としない、と言うのが現状である。現状では、一の郭と仮称した本グスクの最頂部を石積みで囲むことから、シイナグスクの機能した13世紀後半頃の遺構として暫定的に考えたい。以上のように、石積みによって囲まれた空間と露頭岩に囲まれた平場群で構成されたグスクと考えられる。また西側には急峻な崖を配する点も城塞的なグスクとして選地したと考えられる。しかし前章でも述べたとおり自然地形を多く残しており、城塞として整備されたとは解するにはあまりにも不整備であることは否めない。

遺構として特筆されるものに、T.P. 10で確認された炉跡がある。炉跡は一の郭北側の郭（北の郭(3)）で確認されている。直径90cmの円形で、管見に及ぶ範囲で報告書より類例を探すと、銘苅原遺跡（那覇市教育委員会1997）の炉跡、真志喜森川原遺跡の1・2号土坑（宜野湾市教育委員会1994）に近似すると考える。機能については、杉井（2002）が屋外炉として推定し、呉屋は2号炉を灰穴と推定する。シイナグスク検出の土坑は円形で煙だし・焚き口等が存在せず単純な形であることからやはり調理に係る炉などをイメージする。しかし、サイズが大きいという印象も拭えない（当該期の一般的な煮沸具として鍋形の土器がある。この土器の底径はおおよそ20～30cm程度であることを考えるとやや大きいような印象を受ける）。また、遺構について村上氏に鍛冶炉について、興味深いご指摘をいただいた。それは鍛冶ではないが炭焼きを行う窯で伏焼という手法があり、サイズの近似するという

ことであった（村上恭通氏2003年私信）。沖縄でも羽地大川で炭焼きの手法として「ウーシ焼き」というのが聞き取りされている（仲村・ほか1996）。「伏せ焼き」の方音と考えられる。今回の調査ではT.P.10で確認されたこの炉跡について結論を求めることは難しい。周辺に遺構を確認することはできなかったのは単に調査面積の都合であり、今後北の郭（3）に建物跡があるのか、あるいは炉の付帯施設がないかなどを確認していくことが重要である。なお、炉跡覆土より炭化植物が検出されており調理に関わる炉である可能性がやはり有力視されている。いずれにせよ、炉単体での検討は困難であり今後は住居跡を検出するとともに炉の使用方法などについても詳細に調査する必要がある。

出土遺物（人工遺物）について約9割は在地の土器である。中国陶磁器は先述したとおり、13世紀頃に年代的なまとまりがある。これは今帰仁城跡（主郭Ⅸ層）と同様の傾向である。この点では比較的時期が限定できる当該遺跡の状況を考えると、土器編年を考える上で示唆に富む。それは、鍋（浅鉢）形とした資料に滑石製石鍋模倣の資料がないということである。あわせていわゆる「瘤」と呼称される滑石製石鍋の耳が退化したと考えられる資料もなく、さらに滑石を混入する資料もない。このことから13世紀後半頃には既に、石鍋を模倣した資料や石鍋の耳のルディメント（痕跡）としての瘤は無くなっていたものと考えられることができる。もちろん、このような傾向が北部地域だけの特徴である可能性も否定することはできない。いずれにせよ土器の年代が判断できることは成果の一つである。また、カムイヤキ須恵器についても新里（2003）分類のV式段階以降、吉岡（2002）分類の後期段階の特徴に該当する。新里はV式段階には有文資料は消失するため、波状沈線文を施した有文資料は比較的古式の資料とも目されるが、他の頸部資料等については全体的にやや厚手で焼成不良な製品が主体となると考えられる。この点も今帰仁城跡主郭Ⅸ層に類似する。年代的には新里分類のV式は13世紀後半以降と編年されている。

土器・陶磁器以外の遺物では石器が少量得られる。いずれも磨石や叩石であり植物質食糧等の製粉等に用いるなど調理具と考えられる。

また、自然遺物としては貝や獣魚骨等の出土量は乏しかったので割愛したものの、僅かにT.P. 8などで獣骨が得られているが種の同定は行っていない。他の調査地点では皆無に等しい。T.P. 10は今回確認された炉跡内の覆土から、あわせてT.P. 9の包含層からも植物遺体が見出されている。これは微細遺物の検出を目的に土砂を採集しフローテーションによって検出することのできた資料である。266リットルの土壌をサンプリングしてイネ（及びイネ?）では29粒／片、アワ（及びアワ?）では30粒／片であった。これは採集された200個の植物遺体の中で同定可能な81粒／片の内約70%を占めている。他にもコムギ・オオムギ・キビなど栽培植物、特に穀物類が見出されている。今回グスク時代の食糧について植物遺体を具体的にできたことは成果の一つである。調査及びフローテーションの作業では高宮広土氏のご指導をいただきこのような成果を得ることができた。記して謝意を表したい。氏によれば、沖縄本島北部地域の土壌サンプル事例が少ない現状であるが、中南部と比較して採集された植物遺体の比率が異なることが指摘されている。今後、当該地域で同様な植物遺体の検出に努め、北部地域におけるグスク時代の農耕に関する具体的な資料として参考になれば幸いである。

以上、発掘調査で確認された遺構、遺物からシイナグスクの年代や各地区（郭）の機能についてまとめた。前章でも紹介したが、シイナグスクについては地元によって語り継がれる

伝説がある。それは、「北山城（今帰仁城）のできる前に、ここに城を築いて住んでいた按司がいた。しかし、水の便が悪かったので、しばらくしてから北山城に移った（新城1975）」というものである。今回の発掘調査では実にこれを証明するように今帰仁城跡主郭最下層のⅨ層の遺物群（今帰仁村教育委員会1991）に酷似している。今帰仁城以前に築城を行ったかどうかについては断定的に解すには慎重を期するが、少なくとも今回の試掘調査の成果を踏まえるならば、城塞というにはあまりにも自然地形を多く残し不整備であること、今帰仁城跡の築城期に遺跡が形成されたこと、そして現状で確認される遺物が時間的にあまりにも短期間であることは、築城途上で廃城になったとする伝承とほぼ符合すると考える。

あわせて、シイナグスクの西側を蛇行して流れる大井川沿いには前章でも紹介したようにグスクンチジ、ウチグスク、シイナグスク、ジングスクと連続的にグスクが立地している。他にも河川からやや内陸へ入った東側には天底後原遺跡、ウチグスクの緩斜面には玉城の小字名古島原がありここでもグスク時代に該当する遺物が採集されている。河川西側内陸部へ入ったところには謝名大島原遺跡があり、ここでもグスク時代に該当する遺物が採集されており河川流域や支流、丘陵部などがグスク時代より盛んに開発されたことが推測される。全ての遺跡が同時代に存在したと考えるのは安易であるが、今後シイナグスクの周辺地域に点在するグスクと、その関連などを含め調査を進めることが重要である。

末文ながら、今回発掘調査を実施したシイナグスクは、範囲確認された地域で特に重要な4,948.78㎡について公有化することができた。これは遺跡の立地する土地の所有者である協和工業の代表取締役嘉陽宗明氏にご配慮をいただいたことにより成しえたものである。嘉陽氏には調査成果を熟知頂き文化財地域として重要な地域の公有化を了承いただいたことに感謝し、お礼申し上げます。

参 考 文 献

〈あ〉

- 伊仙町教育委員会 1985年 a 『カムイヤキ古窯群Ⅰ』
伊仙町埋蔵文化財調査報告書第3集
伊仙町教育委員会 1985年 b 『カムイヤキ古窯群Ⅱ』
伊仙町埋蔵文化財調査報告書第5集
伊仙町教育委員会 2001年 『カムイヤキ古窯群Ⅲ』
伊仙町埋蔵文化財調査報告書第11集
糸数昌徳 1975年「部落各説」『今帰仁村史』 今帰仁村役場
伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編1940年『琉球国由来記』名取書店
(1988年再販、発行：風土記社)
沖縄県教育委員会 1983年『ぐすく グスク分布調査報告（Ⅰ）—沖縄本島及び周辺離島調査—』沖縄県文化財調査報告書第53集

〈か〉

- 兼次 佐一 1965年『伊豆味誌』琉球史料研究会
宜野湾市教育委員会 1994年『真志喜森川原遺跡』宜野湾市文化財調査報告書第18集
球陽研究会（編）1974年『球陽』読み下し編 角川書店
金武 正紀 1998年「沖縄の貿易陶磁器」『考古学ジャーナル』NO.427 ニューサイエンス社
金武 正紀 2003年「今帰仁城跡出土の陶磁器」『東洋陶磁』VOL.32 東洋陶磁学会

〈さ〉

- 島袋源一郎 1919年『沖縄県国頭郡志』沖縄出版会
島袋 満 1996年「祭祀と行事」『仲宗根誌』今帰仁村字仲宗根公民館
白木原和美 1971年「陶質の壺とガラスの玉」『古代文化』23巻9・10 古代学協会
新里 亮人 2003年「琉球列島における窯業生産の成立と展開」『考古学研究』49巻4号
考古学研究会
新城 徳祐 1975年「史跡名勝及び口碑伝承」『今帰仁村史』今帰仁村役場
新城 徳祐 1982年『沖縄の城跡』（株）新報出版
新城 俊雄 1996年「大井川沿いと炬港」『仲宗根誌』今帰仁村字仲宗根公民館
杉井 健 2002年「沖縄諸島における居住形態の編成とその特質」『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』熊本大学文学部

〈た〉

- 高宮 広土 2003年「赤木名グスク出土の植物遺体（速報）」『赤木名グスク遺跡』笠利町文化財調査報告書第26集
太宰府市教育委員会 2000年『大宰府条坊跡XV』太宰府の文化財第49集

田中 克子 2003年「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その三）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号 博多研究会
玉城村教育委員会 1991年『糸数城跡－発掘調査報告書Ⅰ－』玉城村文化財調査報告書第1集

〈な〉

仲原 弘哲 1988年「謝名の歴史」『じゃな誌』 今帰仁村謝名公民館
仲松 弥秀 フィールドノート『琉球弧の村落探求－4－』沖縄本島北部西海岸－南 本部半島
仲村 誠司・ほか 1996年『羽地大川－山の生活誌』 北部ダム事務所・名護市
今帰仁村歴史文化センター 1997年『なきじん研究 今帰仁の地名－字名と小字－』 Vol.7 今帰仁村歴史文化センター
今帰仁村歴史文化センター 1990年『なきじん研究 今帰仁のムラ・シマ』 Vol.1 今帰仁村歴史文化センター
今帰仁村歴史文化センター 1990年「天底」『なきじん研究』 vol.1
今帰仁村教育委員会 1984年『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10号
今帰仁村教育委員会 1983年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ』今帰仁村文化財調査報告第9集
今帰仁村教育委員会 1991年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集
那覇市教育委員会 1997年『銘苅原遺跡』那覇市文化財調査報告書第35集

〈ま〉

宮城栄昌・高宮廣衛（編） 1983年『沖縄歴史地図（考古編）』 柏書房
森 達也 2000年「宋・元代龍泉窯青磁の編年的研究」『東洋陶磁』VOL.29 東洋陶磁学会

〈や〉

山内 昌勝 1993年「今帰仁の海岸地名（三）炬港をかこむ海岸地名」『すくみち』今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史資料館準備室（『なきじん研究』VOL.6 1996年今帰仁村歴史文化センターより）
横田賢次郎・森田 勉 1978年「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
吉岡 康暢 2002年「南島の中世須恵器- 中世初期環東アジア海域の陶芸交流-」『国立歴史民俗博物館研究報告』94 国立歴史民俗博物館

写真図版



図版1 シイナグスク航空写真



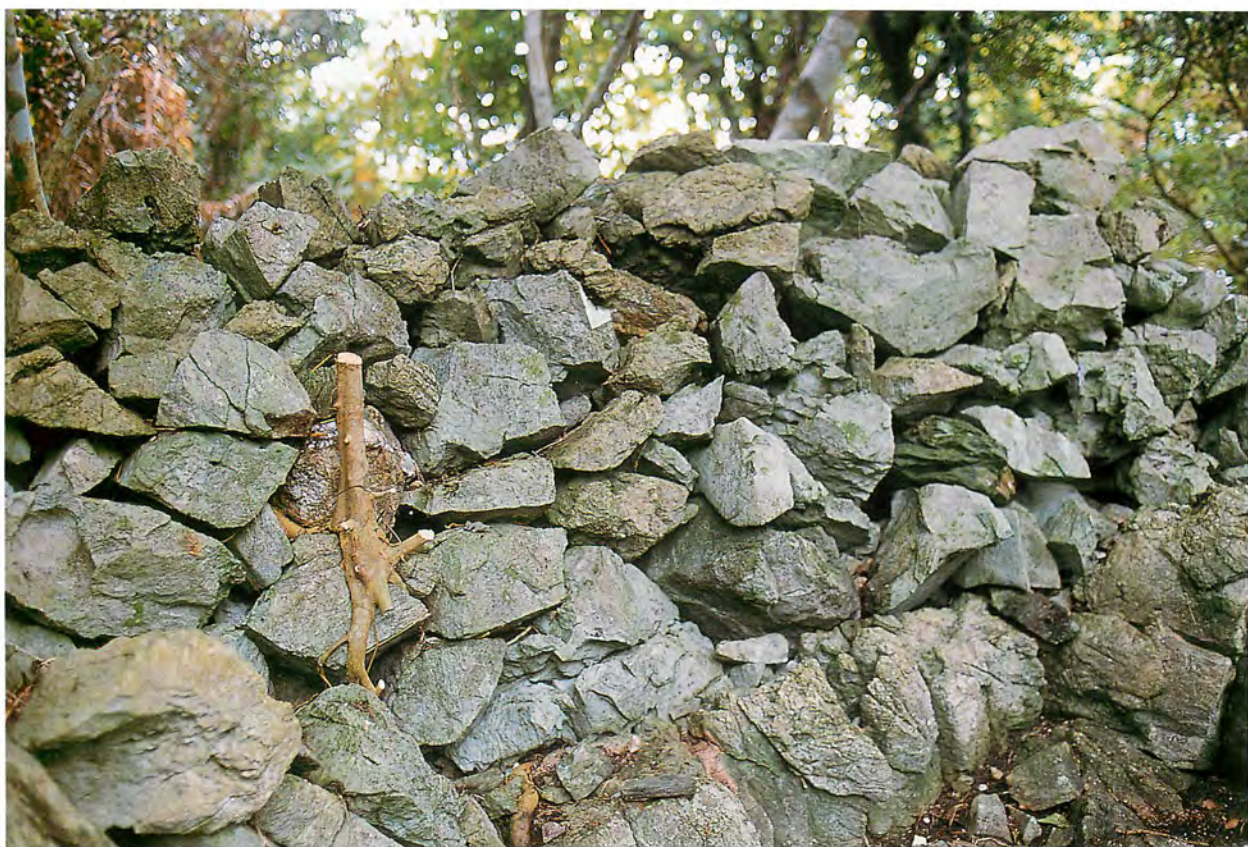
図版 2 シイナグスク伐採状況



図版 3 シイナグスク測量調査の様子



図版4 シイナグスクの郭石積み遺構清掃



図版5 シイナグスクの郭石積み遺構近影



図版6 T.P.1 調査前遠景



図版7 T.P.1 試掘調査状況

図版 8
T. P. 2 試掘調査状況



図版 9
T. P. 2 土器出土状況近影



図版10
T. P. 2 完掘状況近影





図版11 T.P. 3 試掘調査状況



図版12 T.P. 3 完掘状況近影

図版13
T.P. 4 調査前遠景



図版14
T.P. 5 完掘状況近影



図版15
T.P. 6 完掘状況近影





図版16 T.P. 7 遺構検出状況近影



図版17 T.P. 7 遺構完掘状況近影



図版18 T.P. 8 獣骨出土状況近影



図版19 T.P. 8 完掘状況近影



図版20 T.P. 9 完掘状況近影



図版21 T.P. 10 調査前遠景



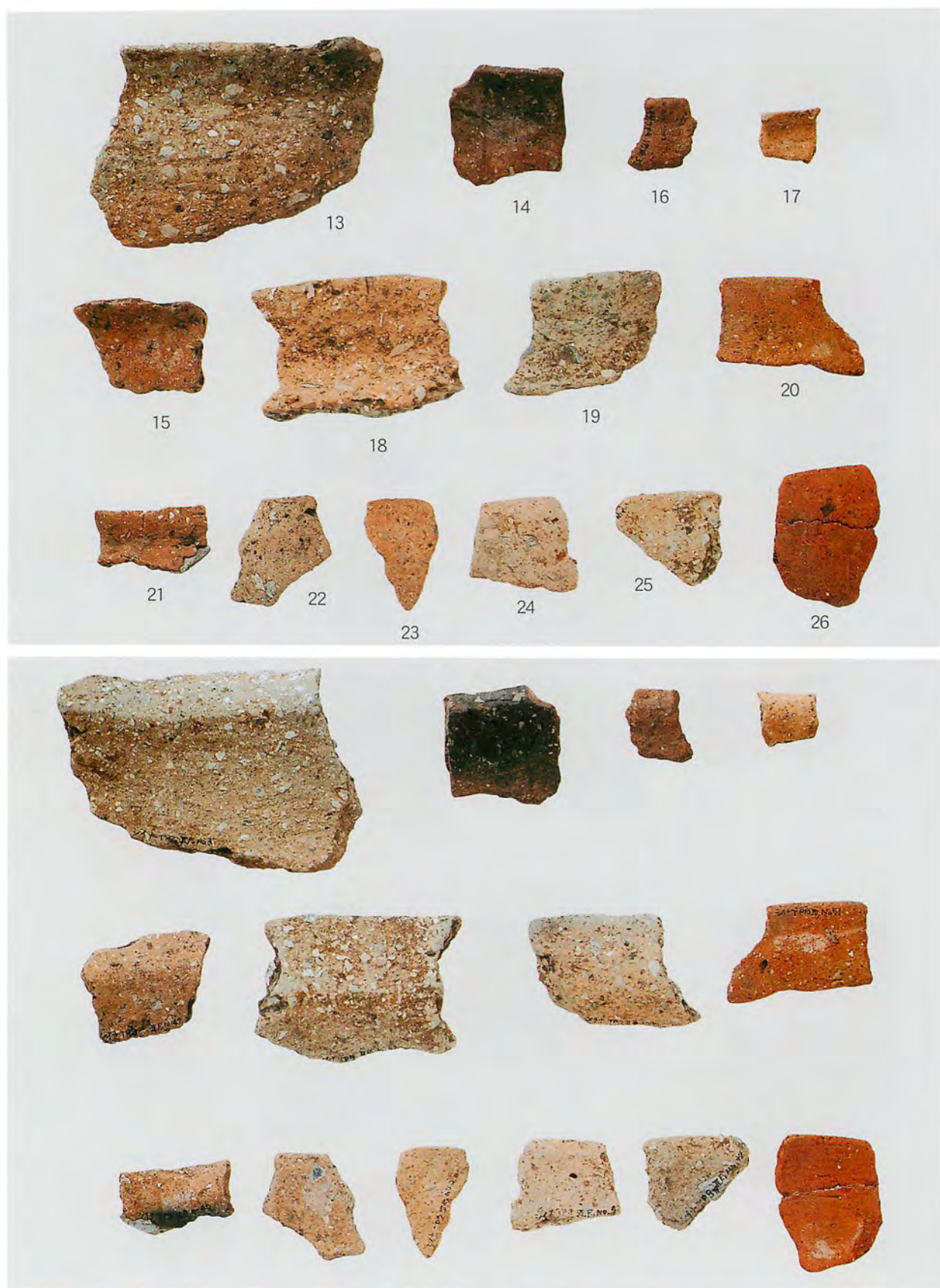
図版22 T. P. 10 遺構検出状況近影



図版23 T. P. 10 遺構完掘状況近影



図版24 シイナグスク出土土器



図版25 シイナグスク出土土器



図版26 シイナグスク出土土器



図版27 シイナグスク出土陶磁器・カムイヤキ須恵器



図版28 シイナグスク出土石器



図版29 ウチグスク採集遺物



図版30 謝名大島原遺跡採集遺物



図版31（第24図） 謝名大島原遺跡採集遺物



図版32 (第25図) 謝名大島原遺跡、天底後原遺跡採集遺物 謝名大島原(15~19)、天底後原(1~6)

シイナグスク

－範囲確認調査報告－

発 行：2004年3月31日
沖縄県今帰仁村教育委員会
編 集：社会教育課 文化財係
〒905－0401 沖縄県国頭郡
今帰仁村字仲宗根232
電 話：(0980)56－3201
F A X：(0980)56－3217

印 刷：文進印刷株式会社
電 話：(098)994－5777

表 紙 写 真：シイナグスクから羽地内海を望む
裏表紙写真：シイナグスク発掘調査の様子

SHIINA GUSUKU

伝説によれば今帰仁城築城以前に 築かれたシイナグスク

今帰仁村のほぼ中央を東シナ海へ注ぐ大井川沿いには多くのグスクが分布しています。

中でもシイナグスクは伝承では今帰仁城築城以前に城造りを計画したグスクとして語られています。発掘調査では、今帰仁城跡の築城期である13世紀後半の資

料を中心に出土するという興味深い成果が得られています。次代の遺物もほとんど出土しないことから短期間で廃城されたと思われます。遺跡はたいへん広い範囲で多くの人がこの土地で生活をはじめたと考えられます。

シイナグスク Shiina Gusuku

DETA

遺跡名：シイナグスク

所在地：沖縄県国頭郡今帰仁村字呉我山72番地

経緯度：北緯26度39分23秒 東経127度58分33秒

調査面積：表面踏査約40,000m²、試掘調査40m²

調査原因：遺跡範囲確認調査

主な時代：グスク時代（13世紀後半）

主な遺構：石積み・炉跡・柱穴

主な遺物：グスク土器・カムイヤキ・輸入陶磁
（龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗・同安窯系青磁無文皿・白磁口禿碗・浦口窯系白磁碗）・石器



NAKIJIN-VILLAGE



※遺跡は文化財保護法により保護されております周辺地域での開発に関しては今帰仁村教育委員会にご相談下さい。

——— 今帰仁村の遺跡に関するお問い合わせは ———

今帰仁村教育委員会社会教育課（文化財係）0980—56—3201